

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

An Anthropological Study on the History of the Kingdom of Ladakh : A Historical Ecological Approach

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 煎本, 孝 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004370 |

ラダック王国史の人類学的考察

——歴史-生態学的視点——

煎 本 孝*

An Anthropological Study on the History of the Kingdom of Ladakh
—A Historical-Ecological Approach—

Takashi IRIMOTO

The history of the Kingdom of Ladakh, Western Tibet, is examined from an anthropological point of view. *La-dvags-rgyal-rabs* is used as a source for historical-ecological analysis of the systems of economy, politics, and religion of the kingdom. The following three results have been found.

(1) INTERRELATIONSHIPS BETWEEN THE SYSTEMS OF ECONOMY, POLITICS AND RELIGION:

The systems of economy, politics, and religion can be seen as an integrated system of the kingdom; *i.e.*, a ruling system. This system of integration was based on the transit trading economy between Central Asia and India—the sovereign right being succeeded by the *rNam-rgyal* dynasty—and the cultural identity of the people as Buddhist. However, the internal mechanism of the kingdom was motivated by the antagonism among the dynasty, the prime minister and the Buddhist temples. Also, the rivalry among the local noble families as well as the different schools of Tibetan Buddhism produced an effect on politics.

(2) RELATION OF THE SYSTEMS TO THE HISTORICAL PROCESS OF THE KINGDOM

The historical process of the Kingdom of Ladakh—*i.e.*, formation, development and decline—can be seen as the changes of the system of integration. That is, the formation of the kingdom was dependent on control over the formerly independent

* 北海道大学, 国立民族学博物館研究協力者

本稿は昭和58年度文部省在外研究員派遣(昭和58年6月~59年4月)による研究成果の一部である。なお、本稿の一部は国立民族学博物館共同研究「ユーラシアと北アメリカにおける北方狩猟採集民文化の比較研究」(昭和59年5月11日)において報告した。

local chiefs, and the control of trading routes and trading activities. The development of the kingdom was dependent on the improvement and expansion of the trading economy, on which the political system was established. Subsequently, the political system functioned for the maintenance of the economic system, through positive feed-back mechanisms. In this stage, the formation of the strong ruling system was represented by *Sen-ge-rnam-rgyal*, the king who concurrently served as prime minister. The kings supported the religion both on the levels of ideology and economy. In return, the religious system justified the kingship. This process could have been indicated by the new role of the monasteries belonging to *anuttara-yoga Buddhism*, the nature of which is secularism and education for the people in general. These monasteries were founded during the second dynasty after c. 1400 A.D., the development stage of the kingdom, in place of *yoga-tantra Buddhism*, which was solely aimed at individual enlightenment. The decline of the kingdom was the result of the dispersion of political authority due to the maturing economy which at this time functioned towards disintegration of the political system. This view is different from the traditional interpretation of the decline of the kingdom, in which disability of individual kings was said to be a cause of this tragedy. It was also pointed out that the process of decline of the Kingdom of Ladakh may be characterized by the fusion of the kingship not only with the office of prime minister but also with the Buddhist temples.

(3) THE ECOLOGICAL SIGNIFICANCE OF THE SYSTEMS

The system of integration of the Kingdom of Ladakh could be analysed in terms of ecological niche—*i.e.*, ecological location of the state and its relation to the external world. It has been revealed that the nature of the ecological niche of the Kingdom of Ladakh was not the internal completeness of a closed system, but that it was permeable which enabled the cultural-economic transmission between Central Asia and India through the Ladakhi political-religious boundary. The carrier of economy and culture were the Kashmiri merchants as well as 'A[r]-rgon traders: the mixed population between Yarkandi merchants and Ladakhi women. As traders, they invaded the geographical and political boundary of the kingdom, but religious identity separated these Moslem traders from the Buddhist inhabitants in Ladakh. Therefore, it should be pointed out that religious identity, functioning as a boundary maintenance mechanism, made

permeability of the north-south cultural-economic transmission possible, and that it makes the system of integration of the Kingdom of Ladakh consistent.

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 序論 | (2) 官僚 |
| 2. 経済機構 | (3) 王朝と官僚の関係 |
| (1) 生態的条件 | 4. 宗教機構 |
| (2) 交易経済 | (1) 宗教の歴史的背景 |
| (3) 交易協定 | (2) 宗教政策 |
| 3. 政治機構 | (3) 教会と王朝の関係 |
| (1) 王朝 | 5. 結論 |

1. 序論

西チベット、ラダック王国は南を大ヒマラヤ山脈、北をカラコルム山脈に囲まれた厳しい地形的条件と生態環境にありながら、地理的には中央アジアとインドとの境界領域を占める。このため、古来よりインド、チベット、東トルキスタンなどの経済、文化交流を通じて、ラダック独自の歴史を展開してきたと考えられる。したがって、ラダック王国の研究にとり、その歴史的背景と変遷過程の理解は必須である。そこで、本稿において、ラダック王国史の人類学的考察を行なう。人類学的考察とは、人類とその活動という研究対象の総合的把握と理解を目的とする。即ち、従来より、歴史、経済、政治、宗教などの各専門分野において断片的、個別記載的に行なわれてきた考証を、より広い枠組の中で総合的に検討することを意味するものである。

歴史-生態学的 (historical-ecological) 視点とは、歴史を生態学的視点から分析、統合する研究方法である。分析、統合とは対象を構成する各要素の抽出とそれらの間の相互関係の検証である。しかし、対象は変化するもの、即ち通時態であるから、そこに静的な構造を前提とはしない。したがって、従来、共時態の分析概念として用いられてきた機能という概念も、ここでは変化(時間)そのものの中に認めることになる。

生態学的視点における生態という用語には2つの概念が含まれる。その第1は環境要因を意味するものであり、社会-文化の外側にあり、それらに一方的な条件を与える外部要因として従来考えられてきたものである。しかし、生態的要因は社会-文化(経済-政治-宗教)により開発、利用されることにより変化し、さらにこのことによ

って経済-政治-宗教との関係が制御されるというフィード・バック機構 (feed-back mechanism) を認めねばならない。したがって、生態はラダック王国史の人類学的考察においては、経済、政治、宗教と同様、王国維持機構とその変化の動的構成要素の一つとして考えられるべきである。次章以下、考察される生態的条件とはこのような意味における動的構成要素である。

生態の第2の概念は対象の全体性である。人類の諸活動を伴う生活全体が人類の生態として捉えられると同様、ラダック王国の機構の全体性をラダック王国の生態として捉えることができる。この生態概念は無論、ラダック王国が有機体あるいはそれと相似のものであるという前提を意味するものではない。研究対象は人間活動によって創造されたラダック王国の機構である。したがって、ここでの生態とは前記の生態(条件)、経済、政治、宗教の包括概念となる。この全体性を考察する時に生態的地位 (ecological niche) という分析概念を用いることが有効である。生態的地位とは、動物生態学の用語として、生物的環境における動物の場所、食物、敵との関係を意味する [ELTON 1927: 63-68] ものである。社会人類学の分野においても民族集団の分布と集団間の関係における地理的要因として用いられ [BARTH 1956: 1079-1089, 1969], さらに生態人類学の分野においても人間集団の利用する計量可能な環境資源的要因として用いられ [HARDESTY 1977: 109-120] ている。しかし、いずれの場合も、外的環境条件としての意味に重点が置かれ、人間集団の自然および他集団との関係における全体的位置づけという視点を欠いている。本論においては、第5章において考察されるように、生態的地位という用語をラダック王国の機構の全体性およびその位置づけを考察するための概念として用いることにする。

以上述べたように、ラダック王国史の人類学的考察とは、ラダック王国の成立から発展、衰退という歴史的(時間的)過程における生態、経済、政治、宗教相互間の動的関係の分析であり、その機構の全体性の考察であると規定することができる。この理論的枠組に基づくと、ラダック王国史の人類学的考察における問題点を以下の様に設定することができる。第1の問題は生態、経済、政治、宗教の間に如何なる関係が存在するのかということである。第2の問題はこの関係がラダック王国の歴史的過程と如何に関連するのかということである。さらに第3の問題はラダック王国の歴史的過程における生態学的意味づけである。この最後の問題においては環境要因としての生態的構成要素の役割と、ラダック王国の全体性としての生態的地位の問題をそれぞれ明らかにする必要がある。

次に、人類学的考察における方法論として、ラダック王国の歴史資料の検討、整理

が必要である。資料として、*Antiquities of Indian Tibet Part II.* [FRANCKE 1926] に註釈を加えて収められているラダック王統史 (*La-dvags-rgyal-rabs*) を用いる¹⁾。ラダック王統史は全10部より成る。第1部は賛歌である。第2部は宇宙論である。第3部はサキヤ (*Sa-kya*) の系譜である。第4部は仏教のチベットへの最初の伝播についてであり、ランダルマ (*Glañ-dar-ma*) に至るチベット諸王の系譜が述べられている。第5部はランダルマによる仏教迫害と仏教の衰退について述べられる。第6部は仏教の復興についてであり、西チベット王朝における諸王の系譜を含む。第7部は西チベット、ラダック王国第2次王朝のセンゲナムギャル (*Señ-ge-rnam-rgyal*) に至る諸王の系譜である。第8部はグラブ・シン王 (*Raja Gulab Singh*) のラダックに対する戦争、即ちドグラ戦争 (*Dogra War*) に至るまでの独立王国として最後のラダック王国の諸王の系譜について述べられている。第9部はドグラ戦争そのものの記載である。最後の第10部はドグラ戦争以後のラダックについての記載である。これらのうち、ラダック王国の興亡に直接関係するのは第6部以後、第8部までである。もっとも、第6部前半部分はラダックの第1次王朝の諸王がチベットの諸王の系譜にさかのぼり得るものであることを正当化することが記載の目的である。しかし、第7部のラダック第2次王朝以後になると諸王の系譜も詳細になり、歴史的事実の具体的記載が多くなる。その年代も、ムガル帝国下にあったカシミールの記録から比較決定することが可能になる。

本稿における考察ではラダック王国史は、成立期 (c. 900–1400 A.D.)、発展期 (c. 1400–1600 A.D.)、衰退期 (c. 1600–1834 A.D.) の時期に分類される。成立期はキデニマゴン (*sKyid-lde Ņi-ma-mgon* c. 900–930 A.D.) からロトロチョクダン (*Blögros-mchog-ldan* c. 1440–1470 A.D.) に至るラダック王国第1次王朝の時代であり、王統史第6部に相当するが、部分的には第5部のランダルマの記載も関連する。発展期はラチェントラクパブム (*Lha-chen Grags-pa-hbum* c. 1400–1440 A.D.) からセ

1) ラダック王統史の存在は Francke [1926: 1–2] によれば、1820–1830 A.D. にかけてラダックに入った Csoma de Kőrös により指摘された。その後、1846–1847 A.D. にラダックを調査した Sir Alexander Cunningham [1854] により利用されている。さらに原書は写本され、Herman v. Schlagintweit によりヨーロッパに持ち帰られ、Emil v. Schlagintweit によりその独訳が、*Abhandlungen der kgl. bayerischen Akademie der Wissenschaften*, vol. X, 1866 として出版される。その後、モラヴィアン宣教師の K. Marx はラダック滞在中に原書に基づきラダックの歴史を編集し、さらに王統史に Munshi Dpal-rgyas によるドグラ戦争の記載を加える。このラダックの歴史は *Journal of the Asiatic Society of Bengal* (Calcutta) の1891, 1894, 1902年に掲載され、それぞれ10世紀の Ņi-ma-mgon から17世紀の Señ-ge-rnam-rgyal まで、Bde-ldan-rnam-rgyal から 1834 A.D. のドグラ戦争まで、そしてドグラ戦争の記載という三部構成になっている。A. H. Francke はこれらの研究成果に基づきながら、ラダック王統史のより完全な編集を行ない、*Antiquities of Indian Tibet Part (Volume) II* として出版するに至る。

ンゲナムギャル (Señ-ge-rnam-rgyal c. 1569–1594 A.D.) に至るラダック王国第2次王朝前半期の諸王の時代であり、王統史第7部に相当する。第1次王朝と第2次王朝とは年代的には重複するが、実質的な交替があったのは c. 1470 A.D. のラチェンバガン (Lha-chen Bha-gan c. 1470–1500 A.D.) の時であったと考えられる。衰退期はデルダンナムギャル (bDe-ldan-rnam-rgyal 1594–1659/60 A.D.) からツェワンラプタンナムギャル (Tshe-dbañ-rab-brtan-rnam-rgyal 1830–1835 A.D.) に至るラダック王国第2次王朝後半期の諸王の時代であり、王統史第8部に相当する。なお部分的には第9部のドグラ戦争の記載も関連する。ラダック王国諸王の在位年代に関しては、キデニマゴン (c. 900–930 A.D.) からジャムヤンナムギャル (hJam-dbyañs-rnam-rgyal 1560–1590 A.D.) に至るまではフランケ [FRANCKE 1926] に準拠するが、ジャムヤンナムギャルの死亡年代を 1569 A.D. とし、これに続くセンゲナムギャル (1569–1594 A.D.) からツェワンラプタンナムギャル (1830–1835 A.D.) に至るまではゲルガン [GERGAN and HASSNAIN 1977] に準拠する。なお、ラダック王国の諸王の名前のチベット名片仮名表記に関しては、ラダックにおける発音を準用することにする。これらは人類学的考察における基礎資料となるものであるが、「ラダック王国史覚書」[煎本 1986]として発表されるので、ここでは重ねて記載は行わない。ただし本稿の理解にとり必要と考えられる歴史的背景に関しては註釈をもって説明を加える。

ラダック王統史はその性質上、ラダック王国諸王の系譜と業績の記載に飾られるが、経済、政治、宗教に関する客観的記述には乏しい。したがって、この資料のみからラダック王国の人類学的考察を行なうことは困難である。しかし、1846–1847 A.D. にかけてラダックをめぐるチベットとドグラの戦争調停の可能性をさぐるため派遣された英国陸軍大尉のカニングガム (Cunningham, Sir Alexander) による報告書「*Ladak, Physical, Statistical and Historical, with Notices of the Surrounding Countries.*」[CUNNINGHAM 1854]に、ドグラ戦争以前のラダック王国の交易経済、政治的側面に関する統計資料が含まれており、これをラダック王統史の歴史的記載の解釈に活用することは不可能ではないと考えられる。

これら諸資料に基づき、第2章はラダック王国の交易経済機構に関して、生態的条件、交易経済、交易協定の各項目別に記載する。さらに、交易経済については、交易活動と交易路、交易商人、交易商品と経済という小項目について述べる。交易協定については、ラダック王国と隣接諸国間の経済的、政治的関係の把握を目的とし、ティンスガン (gTñ-sgaṅ) の交易協定、ワムレ (Wam-le) の交易協定、ラダック (La-

dvags) とクズ (Ku-zu) の間の交易協定という歴史的事例について考察を行なう。第3章は、ラダック王国の政治機構に関して、王朝、官僚、王朝と官僚の関係の各項目別に記載する。官僚制に関しては、宰相、官僚について述べ、王朝と官僚の関係に関しては、徴税と分配、政治権力について論じる。第4章のラダック王国の宗教機構に関しては、ラダックにおける宗教の歴史的背景、宗教政策、教会と王朝の関係の各項目について記載を行なう。宗教の歴史的背景に関しては、寺院と宗派、歴史的位置の各小項目について述べ、歴史的関係を明らかにする。宗教政策に関しては、イスラムの影響、宗教維持機構の各小項目について考察を行なう。最後に、第5章において序論で設定した諸問題に関する結論を試みる。

2. 経済機構

(1) 生態的条件

ラダック (Ladakh; チベット語: La-dvags) はヒマラヤ山脈北西部に位置する。その東には高度 4,700 m から 4,800 m のチベット高原が広がり、南には高度 7,135 m のヌン (Nun)、高度 7,077 m のクン (Kun) をいただく大ヒマラヤ (Great Himalaya) 山脈、西にはピル・パンジャル (Pir Panjal) 山脈からヒンドゥー・ラジ (Hindu Raj) 山脈、ヒンドゥー・クシュ (Hindu Kush) 山脈がアフガニスタンへと続き、北には高度 8,611 m の K2 を盟主とするカラコルム (Karakoram) 山脈と崑崙 (Kunlun) 山脈が新疆 (Sinkiang) との境を接する。ラダックは周囲をヒマラヤの山脈群にかこまれた地域である。

ラダックの地形はトランスヒマラヤ (Transhimalaya) とも呼ばれるラダック (Ladakh) 山脈、カイラス (Kailas) 山脈、ザンスカール (Zangskar) 山脈とそれらの間を平行に南東から北西方向へと流れるインダス (Indus) 河の深い溪谷によって特徴づけられる。標高はラダックの中心地レー (Leh) で 3,554 m である。雨量は年間 50 mm ときわめて少ない。したがって、植生は高山性のステップ (Alpine steppe) と石の多い砂漠 (Desert) となる。気候は一日においても、また年間においても寒暖の差が大きく、レーの7月の最高気温は 33°C、1月の最低気温は -25°C に達する。積雪量は少ないが、乾燥寒冷な冬はユーラシア北方の厳しい気候条件とも共通する。したがって、ラダックの自然環境は、高標高、乾燥、大きな寒暖差をその特徴とすることができる。

ラダックの人口は約100,000人であり、その面積は97,872平方 km である。したがって、人口密度は1平方 km あたり約1.0人となる。このうち多くは仏教徒であるが、他にイスラム教徒、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒を含む。言語はチベット語のラダック方言 (Ladakhi) である。これはチベット北東部のアムド (Amdo) 地方の方言とともに、ラサ (Lhasa) を中心とする中央チベット方言に比較してより古い型を残すとされる。ラダック方言はレーを中心とするレー方言、これよりインダス河上流域のロン (Rong) 方言、下流域のシャム (Sham) 方言に細分される。これより西部ではプーリック (Purig) 方言、バルティ (Balti) 方言となる。

住民は農耕と牧畜を生業とする。農耕は小麦と大麦の栽培が行なわれるが、高地では、大麦のみとなる。豆、ジャガイモ、野菜の栽培も行なわれ、またインダス河下流域においてはアズ、クルミ、リンゴ、ナシなどの果樹が植えられる。牧畜は、山羊、羊、牛、ヤク、牛とヤクの雑種が対象となる。夏の間、山羊、羊は村の近くの牧草地に連れて行かれ、夜には村にもどされる。ヤクなどの大型動物は村から離れた高地にある夏の牧草地に放牧される。ここでは乳がしぼられ、凝乳、バター、チーズが作られる [煎本 1981: 344-348]。

しかし、この自然環境と生業形態の特質はラダック王国の閉鎖性を意味するものではない。ラダックはヒマラヤの山脈群に囲まれた近づき難い地理的条件にありながら、決して文化的、歴史的に孤立していたわけではない。逆に、中央アジアとインドを結ぶその地理的位置ゆえに、南北、東西にわたる交易と文化交流を通して、インド、チベット、中国という大文明の影響を受けながら、独自の歴史を展開してきたと考えることができるのである。たとえば、ラダックのレーはインドのジャム (Jammu) あるいはカシミール (Kashmir) から、中央アジアのヤルカンド (Yarkand)、カシュガル (Kashgar)、コータン (Khotan) への交易路にあたっていた。またレーはインダス河に沿ってチベットのラサ (Lhasa) への通路にもあたる。これらの交易路はカラコルム山脈、崑崙山脈、チベット高原、大ヒマラヤ山脈の高い峠を越えるものではあったが、古来よりインド、中央アジア、チベットを文化的、経済的に結ぶ役割を担ってきたのである。

事実、インドとヤルカンドとの間の交易は、ラダック王朝成立以前からこの地において行なわれていたと考えられる証拠がある。カラツェ (Kha-la-rtse) の近くには、インダス河に掛る橋を警護していたと考えられる要塞形式の税関跡があり、ここから多くの玉が出土している。年代はチベットが吐蕃王国の支配下に置かれた 800-1000 A.D. と考えられる [FRANCKE 1977: 80-81]。

後になると、ラダック王統史には交易に関する記載を数多く見出すことができる。たとえば、ラチェンツェワンナムギャル (Lha-chen Tshe-dbañ-rnam-rgyal c. 1532–1560 A.D.) が、ラダック北方のホル (Hor: Turkmans)²⁾ に対して戦争を仕掛けようとしたのを、ヌブラ (Nub-ra) の住民の反対の嘆願を受けて、思いとどまったのは、ヌブラがラダックとヤルカンドの間の交易路にあたり、当時、住民が交易活動への害を恐れた結果であると解釈できよう [FRANCKE 1977: 106]。

また、モンゴル戦争 (c. 1679–1685 A.D.)³⁾ 後、カシミールおよびチベットとラダックとの間の講和条約において、交易に関する協定が取り決められるのは、ラダック王国と隣接諸国における交易経済の重要性を示すものであると理解できる。さらに、プーリック (Pu-rig) 地方の支配権を持ったドラシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal) が、ラダック王国のプンツォクナムギャル (Phun-tshogs-rnam-rgyal 1739–1752 A.D.) の治世、王位継承抗争にからみ、カシミールからバルティスタンおよびレーへの交易、さらにインドからレーへの交易使節団と使者に対し干渉を加えようとし、ワムレ (Wam-le) の条約 (1752 A.D.) によりこの試みが阻止された経緯は、ラダック王国における交易活動と交易経済の重要性を示すものである。

同様に、ドグラ戦争 (1834 A.D.)⁴⁾ 後、チベットとラダックとの国境線の明確化と交易活動の確約が取り決められたのは、この時期に至る交易活動の重要性を裏付ける

2) ホル(Hor)の称はチベット語ではウイグル種族を指す。チュルクの一支であるウイグル人がタリムの北(トゥルフアン等)にあるオアシス地帯に拠り、ついで872年頃には甘州地域に至った。このウイグル人はホル(Hor: Ho-yo-horの略)と呼ばれ、チベットでは軍隊、馬、野蠻、乱暴の観念と結びついて残っている [STEIN 1971: 47]。しかし、ホルの名は後代にはジンギス・カーン一党のモンゴル人を指すようにもなった。たとえば、カム地方(ガンゼ、ペリ地域)のホルを称する五公国はその末裔であると称している [STEIN 1971: 17]。なお、チュルク人の名は中国語では突厥(古音Turkut)であるが、チベット語ではDrugu、またはDrugとなった。さらにモンゴル人はチベット語でソクであるが、これはもともと古代のソグド人をいう称(古代チベット語ではSog-dag)から来たものであろう。彼等はココノール地域に集まったモンゴル起源の遊牧民である [STEIN 1971: 20]。なお、Francke [1926]はラダック王統史に登場するホルをTurk, Turkmansと考えているようである。

3) ラチェンデレクナムギャル(Lha-chen bDe-legs-rnam-rgyal 1660–1685 A.D.)の治世、ラダック王国はモンゴル-チベット軍の攻略を受ける。これに対しラダック王は当時ムガル帝国下にあったカシミール太守に救済を求め、一時的にモンゴル-チベット軍を退却させるが、この代償としてカシミールに多大な債務を負うことになる。さらにその後、再び侵攻をはかったモンゴル-チベット軍のためラダック王国は東部地域を失い、結果としてラダック王国の覇権は著しく縮小することになる。

4) ツェパルミギェルドントルップナムギャル(Tshe-dpal-[mi-hgyur] Don-grub-rnam-rgyal 1808–1830 A.D.)の治世、当時勢力を伸ばしていたシーク王国下にあったジャム、ドグラ(Dogra)地方のグラブ・シン王(Raja Gulab Singh)と将軍ゾラワール・シン(Wazir Zorawar Singh)により、ラダックは征服され、独立国としてのラダック王国の歴史は終わることになる。これに関して王統史第8部は、木-馬年の翌年(1834 A.D.)、シン(Sin)軍がラダックに到着したとのみ記している。

ものである。さらに、中央アジアとインドとの間の交易活動は大英帝国下において行なわれ、1940 A.D. の第2次世界大戦による国境封鎖時期に至るまで継続されていたのである。したがって、交易活動はおそらくラダック王国成立以前から1,000年間に及び、西チベットにおいて重要な位置を占めていたことを指摘することができる。

この交易活動を成立させていた基盤は、ラダック王国の生態的条件にある。ラダックはヒマラヤ山脈群北方の中央アジアと南方のインドとの間の生態的境界領域として位置づけることが可能である。したがって、ラダック王国はこれら生態的、文化的に異なる地域を結ぶ交易路を確保することにより、交易活動を王国の経済基盤の一つに成し得たと考えることができるのである。

(2) 交易経済

(i) 交易活動と交易路

中央アジアとインドとを結ぶ交易路は東西に走る大ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈を南北に横断せねばならない。したがって、限られた峠を越えるいくつかの限定された交易路が存在することになる(図1)。北インドのカンミールを起点として古来より西方にガンダーラ (Gandhāra) に至り、カブール溪谷を通り中央アジアに続く交易路があり、北方にはギルギット (Gilgit)、フンザ (Hunza) を経てカラコルム山脈のミンタカ (Mintaka) 峠、あるいはクンジェラブ (Khunjerab) 峠を越え中央アジアのカシュガル (Kashgar) に至る交易路、同様にスカルド (Skardu) からバルトロ (Baltoro) 氷河を経て、カラコルム山脈のアジル・デプサン (Aghil Depsang) 峠を越え中央アジアのヤルカンド (Yarkand) に至る交易路、さらに大ヒマラヤ山脈のゾジ (Zoji) 峠を越えカルギル (Kargil) に至り、さらにナミカ (Namika) 峠、フォト (Photo) 峠を経てラダックのカルシ (Khalsi)、レー (Leh) に至り、ここからヌブラ (Nubra) を経てカラコルム山脈のカラコルム峠を越えてヤルカンドに至る交易路がある。また、レーからは東方にルトクを経てチベットのラサ (Lhasa) に至る交易路がある。

このうち、ラダックのレーと中央アジアのヤルカンド、あるいはコータン (Khotan) を結ぶ交易路には、交易品および利用時期に基づいて以下の交易路が認められる [BAMZAI 1962: 229]。即ち、(1)レーからヌブラ溪谷経由、カラコルム峠、キリアン (Killian) 峠を越えてヤルカンドに至る交易路、(2)レーからシヨク (Shiyok) 溪谷経由でカラコルム峠、ヤンギ・ダワン (Yangi Dawan) を経てヤルカンドに至る交易路、(3)レーからチャンチェモ (Chanchemo) 経由でサジュ (Saju) 峠を越えてヤルカンド

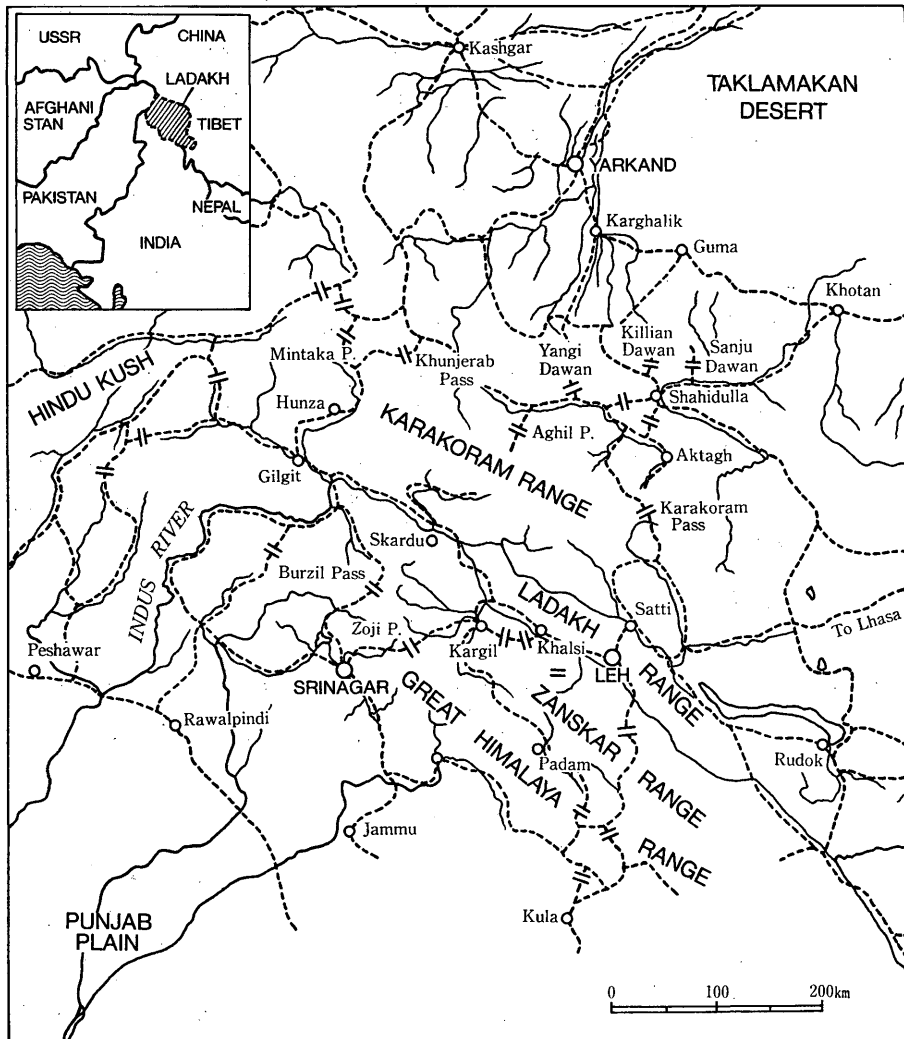


図1 西チベットにおける中央アジア-インド間交通・交易路

に至る交易路，そして(4)レーからイルチ (Ilchi) 峠を越えて直接コータンに至る交易路である。これらのうち、レーからシヨク溪谷を経てヤルカンドに至る交易路は冬期に利用されるが、これは冬期には積雪のある峠越えよりも結氷した川上の通行が容易となるためと考えられる。また、インドからラダックのレーに至る交易路としては、先に述べたヒマラヤ山脈のゾジ峠(3,444 m)を越える以外に以下の様な交易路が可能である。即ち、ジャム (Jammu) からバルダルワ (Bhardarwah) を経て、大ヒマラヤ山脈のウマシ (Umasi) 峠(5,234 m)を越え、ザンスカール (Zanskar) に至る。

ザンスカールからは、ザンスカール山脈のシンギ (Singi) 峠, シシ (Shishi) 峠を越えラマユル (Lamayuru) 経由でレーに至る, あるいは冬期結氷したザンスカール川を通過しインダス河との合流点であるニム (Nimmu) を経由してレーにいたる, あるいはザンスカール山脈のチャチャ (Chacha) 峠を越えレーに至る交易路が考えられる。あるいは、インドのシムラ (Simla) からラホール (Lahoul), クル (Kulu) 経由でロータン (Rohtan) 峠を越えケイロン (Keylong) に至る。ここから大ヒマラヤ山脈のシング (Singo) 峠 (5,097) を越えザンスカール経由でレーに至る, あるいはバララチャ (Bara Lacha) 峠 (4,891), マラン (Marang) 峠, タグラン (Taglang) 峠を越え, インダス河上流ウプシ (Upshi) 経由でレーに至る交易路がある。しかし, これらはいずれも大ヒマラヤ山脈の高標高の峠を越えるものであり, 積雪のため通年の通行は困難となる。しかし, 後に交易協定の項で述べるように, クルとラダックとを結ぶ大ヒマラヤ山脈越えの交易路はこれら王国間の定期的な交易活動に利用されていたことも事実である。

カシミールにおいては交易路の途中, 峠に監視所 (dranga) が設けられ, 同時に税関 (Sulkasthana) としての役割もはたし, サウルキカス (Saulkikas) と呼ばれる税関吏が輸入品, 輸出品に対して課税を行なった。カシミール王統史 (*Rājatarāṅgīnī*) の記載によると, この輸出入関税は領主の重要な財源となっていた [BAMZAI 1962: 229] ことを知ることができる。

また, ラダックのレーからチベットのラサへの交易路の途中にも, 国境であるパンゴン (Pangong) 湖東端に位置するルトク (Rudok) にチベットの前進基地があった。この交易路には25の宿場があり, 幕舎, 家屋は約200名の旅行者を収容することができた。これらの宿場は官吏の責任下に置かれ, 郵便物などの運搬のためのヤクなどの動物の供給の任を負っていた [BAMZAI 1980: 26] のである。カシミールのスリナガルからゾジ峠を越えてラダックのレーに至る交易路は, 徒歩で40日を必要とした [DESIDERI 1937: 77; cf. RIZVI 1983: 76]。さらに, カシミールからレーを経て中央アジアのヤルカンドに至るには2カ月半を要した [CUNNINGHAM 1854: 241] という。交易路は険峻であり, 通行には地形的困難さの他, 戦争, 強盗などの危険性が伴った。交易品の運搬は動物に依存し, 馬, ラバ, ロバが使用されたが, 南西部においてはヒトコブラクダ, 寒冷地においてはフタコブラクダ, さらに高標高においてはヤク, ヤクと牛の雑種が用いられた。したがって, カシミールからラダック経由でチベットに至る交易においては, 「ラサ (チベット) に行った者は二度とは戻らず, もし戻ることがあれば, その者は永久に金持ちである」というカシミールの諺 [BAMZAI

1980: 28] によって表現されるように、交易の困難さと、同時にその利潤の大きさを示しているのである。

交易活動と交易路についてさらに検討するため、カシミールとヤルカンドを結ぶ交易路について、行程および標高を指標にその垂直断面図を *Gazetteer of Kashmir and Ladakh* [GOVERNMENT OF INDIA 1890] の資料に基づいて製作し、以下に考察する。図2にスリナガル(Srinagar)からゾジ(Zoji)峠、ドラス(Dras)、カルギル(Kargil)、ラマユル(Lamayuru)経由でレー(Leh)に至る交易路を示し、さらにレーからセセル(Seser)峠、カラコルム(Karakoram)峠を越えてシャヒドゥラ(Shahidulla)経由でヤルカンドに至る交易路を示す。前者はカシミールとラダック間の交易に最もよく利用される交易路であり、後者もラダックと中央アジアとを結ぶタビスタニ(Tabistani)と呼ばれる夏期の交易路である。冬期の交易路はザミスタニ(Zamistani)と呼ばれ、レーからディガル(Digar)までは夏期と同様であるが、ここからシヨク(Shyok)溪谷に入り、ムルガイ(Murghai: Bulak-i-Murghai)において再び夏期交易路と合流し、カラコルム峠を越えた後、ヤンギダワン(Yangi Dawan)経由でヤルカンドに至る。したがって、図2に示した行程は、ラダック経由でインドと中央アジアを結ぶ最も一般的な交易路であったと考えることができる。

カシミールのスリナガルの標高は 1,600 m である。ここはインドのパンジャブ平原より 1,000 m 以上も標高が高く、ピル・パンジャル(Pir Panjal)山系と大ヒマラヤ山脈にはさまれたカシミール溪谷に位置する。交易路はシンド(Sind)川に沿ってヒマラヤ山脈南面を登り、標高 2,637 m のソナマルグ(Sonamarg)を経てゾジ(Zoji)峠を越える。標高は 3,444 m である。大ヒマラヤ山脈を越えるとドラス(Dras)川に沿ってその北面を下降し、スル(Suru)川との合流点であるカルギル(Kargil)に至る。これらの川はインダス河支流であるが、レーに至る交易路は一端これを離れてザンスカール山脈西端を越え、再びインダス河本流に下ることになる。このため、ザンスカール山脈のナミカ(Namika)峠(3,627 m)およびフォト(Photo)峠(4,167 m)を越え、ラマユル(Lamayuru)経由でカルシ(Khalsi: Khalatse)に至る。カルシは標高 3,048 m のインダス川沿いにある下手ラダック地域の中心地である。これより先、インダス河に沿って遡行し、標高 3,505 m (地図資料では 3,554 m) のラダック王国の首都レーに到着する。スリナガルからレーに至る全行程距離は 408.8 km であり、スリナガルとレーとの間の高度差は、1,905 m である。しかし、行程は図2に示すごとく登攀と下降とをくり返しているため、累積登攀高度は増加し、3,991 m に達する。交易路における最高到達高度はフォト峠の 4,167 m である。気候条件もヒ

マラヤ南面山麓の多雪地帯から、トランスヒマラヤの乾燥、寒冷地帯に至る。

次に、ラダックのレーからカラコルム山脈を越えて中央アジアのヤルカンドに至る交易路は、レーから北方にラダック山脈をディガル (Digar) 峠 (5,456 m) 経由で越える。ラダック山脈の北を南東から北西に向かって流れるショク (Shyok) 川に至り、これを横断した後、支流のヌブラ (Nubra) 川を、遡行する。そして、カラコルム山脈東端の支山脈をサセル (Saser) 峠 (5,334 m) で越える。ここで再びショク川上流を横断する。アクサイ・チン (Aksai Chin) 高原東端のデプサン (Depsang) 高原を南から北に横断する。標高は 5,425 m である。再びショク川右股の源流を横断し、カラコルム山脈主稜を登攀する。標高 5,654 m のカラコルム峠を通過し、中国領ヤルカンド側に出る。行程の記述によれば、呼吸困難であり、地表は砂礫と粘土が暴露し、草、燃料はなく、登りは急峻であるという。カラコルム山脈を越えると、ヤルカンド川支流に沿って降下し、マリクシャ (Maliksha: Aktagh) に至る。ここからさらにスジェト・ディワン (Suget Diwan) 峠 (5,368 m) を越えてシャヒドゥラ (Shahidulla) に至る。シャヒドゥラの標高は 3,591 m であり、ここからヤルカンドに至るにはいくつかの経路があるが、サンジュ・ダワン (Sanju Dawan)、キリアン・ダワン (Killian Dawan)、あるいはヤンギ・ダワン (Yangi Dawan) などいずれかの峠を越えねばならない。

シャヒドゥラ以降の行程については *Gazetteer of Kashmir and Ladakh* には記載がないが、*World Travel Map No. 15 Indian Subcontinent* (John Bartholomew & Ltd.) に従えば、タクラ・マカン砂漠 (Tak-la Makan: Ta-k'ola-ma-kan sha-mo) 南縁に沿って、グマ (Guma)、カルガリク (Karghalik) 経由でヤルカンド (Yarkand) に至るものと考えられる。標高については地図の色彩区分によると、シャヒドゥラからタクラ・マカン砂漠へ南から北に横断するには約 5,029 m の峠を越え、タクラ・マカン砂漠南縁の町々は約 1,250 m の高度を持つものと考えられる。図2において、これらの行程は点線で示した。

レーとヤルカンドとの間の全行程距離は 713.6 km であり、その高度差はレーの方の標高が高く、2,256 m である。累積登攀高度は 7,468 m に達する。交易路における最高到達高度はカラコルム峠の 5,654 m である。気候条件はトランスヒマラヤの乾燥・寒冷から、カラコルム山脈の高標高山岳気候を経て、内陸アジアの砂漠、乾燥気候に至る。

以上、カシミールのスリナガルからラダックのレーを経由して中央アジアのヤルカンドに至る交易路について記載した。この交易路の全行程距離は 1,122.3 km におよ

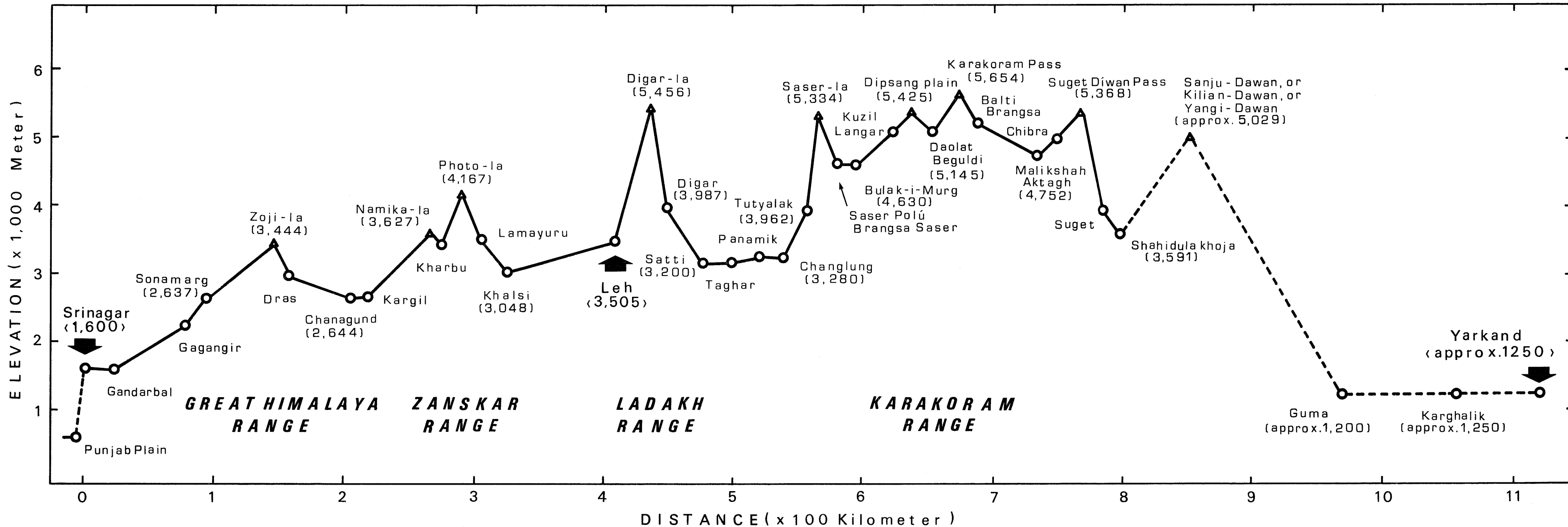


図2 カシミールと中央アジア間の交易路の垂直断面図 (Srinagar—Leh—Yarkand)

び、その全累積登攀高度は 11,459 m に達する。しかも、これは交易路の片道の行程であり、往復行程はさらにこの 2 倍に達するものである。スリナガルからヤルカンドに至るには 2 カ月半の日程を要し、行程距離の長さ、登攀高度の高さに加え、変化する気候条件、特に高標高における身体的な高度順応の必要性を考えると、ヒマラヤ山脈群を南北に横断する交易活動の困難さを指摘することができる。

(ii) 交易商人

交易活動に従事する商人は多様であった。カシミールのスリナガル、あるいはラダックのレーのバザール（市場）ではトルコ人、チベット人、インド人、ネパール人の交易商人たちが、彼等の宿泊所、倉庫を建てていた。これらの中でもカシミールの交易商人はその活動が特に盛んであり、カシミールだけではなくチベットの交易についても彼等はその掌中に治めていた。中央アジア、チベットとの交易のため、彼等はヤルカンド、カシュガル、チベットに商店を確立していた [BAMZAI 1962: 496]。

カシミールとラダックとの間の羊毛の交易に関しても、18世紀初頭においてカシミール交易商人は多数の代理人をラダックに置き、年間を通して羊毛を集めさせ、5月から8月になると幾千人もの男達がカシミールからレーに向かいこの羊毛を持ち帰った [DESIDERI 1937: 73; cf. RIZVI 1983: 76]。もっとも、ラダック人の交易商人によっても、羊毛布がラダックからカシミールにもたらされた [BAMZAI 1962: 495]。

カシミール商人の活躍はめざましく、Sven Hedin [HEDIN 1909: 55-56] の記載によると、ドグラ戦争 (1843 A.D.) によりラダック王国の独立が失われた後、チベットとの間の政府交易は Hajji Nazer Shah 一族の配下にあるイスラムの交易商人にまかされたという。彼の一族は約 300 名を数え、ラサ、シガツェ、ガントック、ヤルカンド、スリナガルの出張店舗はすべて彼の息子達、あるいはそのまた息子たちのもとにあった。年間の純収益は 25,000 Rs. にのぼり、彼の名前は内陸アジアの全域に知られ、尊敬を集めていた (cf. RIZVI 1983: 81)。

ラダックにおいてはアルゴン ('A[r]-rgon: Akhon) と呼ばれる [FRANCKE 1926: 240] 特異な交易商人の集団が認められる。彼等は東トルキスタンからの交易商人とラダック女性との間の婚姻による子孫であり、*Gazetteer of Kashmir and Ladakh* [GOVERNMENT OF INDIA 1974 (1890): 172] によれば、ラバヤポニーの馬方としてレーからの交易活動に従事していた。彼等はイスラムであり、レーと中央アジアとを結ぶ交易活動に関する専門集団を形成していたと考えられる。もっとも、アルゴンは、カシミール人とチベット（ラダック）人との混血であり、ラダックのレー、チャチョト (Chachot) のみならず、中央アジアのカシュガル、ヤルカンド、アクス、コータ

ンにおいてもその集団が見出され、その名称はトルコ語の *Arghun* (fair: 金髪, 白い膚) に由来するもので、ラダックの住民と異なる身体的特徴に基づくものである [CUNNINGHAM 1854: 291] とも考えられている。

さらに、ラダックとクルとの間の交易の記載 [FRANCKE 1926: 221-224] によれば、ラダックのシェ (Śel) においてはフォーナ (Pho-ña) と呼ばれる世襲の交易監督の任にあたる者がおり、彼等はラダック王国とクル王国との間の鉄と硫黄との王国間の公式交易活動に従事していた。彼等はピティ (dPiti), カルチャ (dKar-cha), ニュンティ (Ñun-ti) を交易活動域に含んでいたと考えられる。

以上の記載から、王国間における交易活動に関してはラダック人も従事していたが、彼等に比較すれば、カシミールの交易商人、およびアルゴンと呼ばれる東トルキスタンあるいはカシミールからの交易者とラダック女性との混血によるイスラム交易専門集団の方がより重要な役割を占めていたと考えることができる。特に、後述するモンゴル戦争 (c. 1679-1685 A.D.) におけるティンスガン (gTiñ-sgañ) の講和条約以後、交易経済の大きな部分を占める羊毛交易に関してはカシミールの独占権のもとに置かれ、カシミール人の交易商人がその主たる担い手であったことを指摘することができる。

(iii) 交易商品と経済

ここでは交易活動に伴う具体的な交易商品とその経済的側面について、Cunningham, Sir A. [1854] の統計資料に基づいて検討し、ラダック王国の交易経済の特徴を明らかにする。

表1に示したように、ラダック全体の交易品の年間総額 1,029,350 Rs. のうち、国内取引の占める割合は0.7%の7,500 Rs. にすぎない。また国内生産物の輸出は

表1 ラダックの交易経済における国内取引・国外取引の生産品年間総価格と割合¹⁾

| | 総価格 (Rs.) ²⁾ | % |
|-----------------|-------------------------|-------|
| 1. 国内取引 | 7,500 | 0.7 |
| 2. 国外取引 | | |
| (i) 国内生産品 (輸出) | 80,000 | 7.8 |
| (ii) 国外生産品 (輸入) | 487,850 | 47.4 |
| (輸出) | 454,000 | 44.1 |
| 総計 | 1,029,350 | 100.0 |

1) Cunningham [1854: 238-240, 251] の資料に基づいて作製。

2) Rs. はインド通貨 Rupees の略。

80,000 Rs. で全体の7.8%を占めるのに対して、外国製品の輸入および輸出の割合はそれぞれ47.7%と44.1%であり、その合計は全体の91.5%に達する。国内取引における製品は毛布、粗羊毛製品、ヤクの毛織 Tent であり、これらは自家消費される。大量に生産される毛織袋は交易品の運搬に

使用されるものである。国際取引には国内生産品の輸出および国外生産品の輸出入がある。前者は山羊毛・羊毛であり、カシミール (Kashmir)、ヌルプール (Nurpur)、アムリツァル (Amritsar)、ランプール (Rampur) に輸出される。この他、硼砂、硫黄、アンズおよびブドウなどの乾燥果実が含まれる。後者の国際取引における国外生産品の輸出入はラダックの交易経済にとって最も重要な位置を占める。この重要性は製品価格総額の大きさによるものだけではなく、輸出入に際する関税に由来するものである。即ち、中国領からラダックに輸入される製品は課税対象となるが、この同じ製品がラダックからインド領に輸出される時に再び課税されることになるのである。同様に、インド領から中国領に運ばれる製品に対しても、中継地のラダックにおいて輸入税と輸出税とが課されることになる。インド領と中国領との間の交易品に関する年間総額と税額とを表2に示す。課税は輸入税が9,741 Rs. であり輸出税が6,700 Rs. である。合計は16,441 Rs. となる。この表には含まれていない中国産絹、塩、鉄、銅容器などの関税を含めると、ドグラ戦争以前および以後におけるラダックの関税収入の総計は約18,000 Rs. と見積られる [CUNNINGHAM 1854: 251-252]。以上のことから、ラダックの交易経済は中継交易の特徴を持つということを指摘できる。中継交易経済に関する製品を種類別に示したのが表3である。左欄に示した交易品は中国領ヤルカンド、コートン、チャンタンなどからラダックを経てインド領に送られる原料および加工品である。右欄の交易品はその逆に、カシミールなどインド領地域からヤルカンドに送られる原料および加工品である。また交易品の種類を(1)毛織、(2)毛皮、(3)綿布、(4)絹織、(5)麻布、(6)嗜好品・薬用品、(7)貴金属・宝石、(8)その他、の8項目に分類し、それぞれに含まれる詳細な品目を記載した。以下、これについて検討

表2 ラダックの中継取引における外国製品の国外輸出入品年間総価格と課税額¹⁾

| 国外輸出入 | | 価格 (Rs.) ²⁾ | 課税額 (Rs.) |
|-------|------|------------------------|-----------|
| 輸入 | 中国領 | 267,650 | 7,350 |
| | インド領 | 220,200 | 2,391 |
| | 計 | 487,850 | 9,741 |
| 輸出 | 中国領 | 238,000 | 6,550 |
| | インド領 | 216,000 | 150 |
| | 計 | 454,000 | 6,700 |
| 総計 | | 941,850 | 16,441 |

¹⁾ Cunningham [1854: 251] の資料に基づいて作製。

²⁾ Rs. はインド通貨 Rupees の略。

表3 ラダックにおける中国領産インド向け、およびインド領産ヤルカンド向け中継交易品¹⁾

| | 中国領産インド向け交易品 | インド領産ヤルカンド向け交易品 |
|-------------|--|---|
| I. 毛織 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ショール・ウール (パシユム)²⁾ (チャンタン, ルトク産山羊毛) [原料]³⁾ 2. フェルト 3. スクラート (ラクダ織) 4. カーベット (コートン産) | <ol style="list-style-type: none"> 1. ショール (粗肩掛) [製品] 2. ジャミワール (肩掛布) [製品] 3. 錦織 (粗) [製品] |
| II. 毛皮 | <ol style="list-style-type: none"> 1. プルガー (ロシア皮) 2. クンドゥズ (クロテン毛皮) 3. ガマ (黒皮) 4. キムサン (黄金色皮) 5. サグリ (緑皮) | <ol style="list-style-type: none"> 1. ラキ (赤染山羊皮, ヌルプール産) 2. カワウソ毛皮 |
| III. 綿布 | <ol style="list-style-type: none"> 1. パルチャ・サムスン (粗木綿布) [製品] 2. パルチャ・ズック (粗木綿布) [製品] | <ol style="list-style-type: none"> 1. 綿 (開花) [原料] 2. 綿 (粗綿) [原料] 3. 綿 (薄綿) [原料] |
| IV. 絹織 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ピロード (粗, 織細) 2. マシュル (粗絹織) (イリチ, コートン産) 3. シリン (織細絹羊毛織) 4. 絹 (生糸, 絹織) | <ol style="list-style-type: none"> 1. 絹 (ムルタンのルンギ) |
| V. 麻布 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ラカ (大麻布) | |
| VI. 嗜好品・薬用品 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 砂糖飴 [製品] 2. チャラス (大麻抽出物) 3. 茶 (緑茶, 紅茶) 4. リワンド・チニ (大黄根: 薬用) 5. チョブ・チニ (中国根: 薬用) 6. プル・イ・ダル・チニ 7. ムシュカナファ (麝香) 8. タバコ 9. ブドウ 10. ピスタチオの実 (香料, 薬用) 11. バディアン・キタイ (中国アズの実) 12. マミラ (黄色根: 眼薬用) 13. ガラバター (膨れた首の治療薬用) 14. ムルハティ (甘草根: 薬用) 15. ダルヤヒ (?) 16. 塩 (チャンタン産) | <ol style="list-style-type: none"> 1. グル (粗砂糖) [原料] 2. 阿片 3. ウコン (染料・香辛料) 4. ショウズク (薬用・香味料) 5. ショウガ (香辛料・薬用) 6. チョウジ (香料・薬用) 7. 黒胡椒 (香辛料) 8. 蜂蜜 9. タマリンド (薬用・料理用) 10. 果汁飲料 (レモン) 11. アシ根 (香料・薬用) 12. トゥルバット (サンシキヒルガオ根: 薬用) 13. ハビリスタン (?) 14. タルマ (ナツメヤシの実: 食用) 15. 塩 |
| VII. 貴金属・宝石 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 銀 (棒・鋳塊) 2. 金 3. 金糸 4. 銀 5. 銀糸 6. トルコ石 (ペルシャ由来, ボカラ経由) 7. ムンガ (サンゴ石) | <ol style="list-style-type: none"> 1. 真珠 |
| VIII. その他 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ゼダーリ (?) (ネパール産) 2. 石鹼 3. ポニー | <ol style="list-style-type: none"> 1. チンツェ (?) 2. ターバン (かぶりもの) 3. 藍 (染料) 4. アオサギ羽毛飾り 5. 靴 (ヌルプール産) |

¹⁾ Cunningham [1854: 241-244] の資料に基づいて作製。

²⁾ 括弧内は交易品の内容と産地について記す。

³⁾ 鈎括弧内は交易品における原料と製品の区別について示す。

する。

毛織の原料のショール・ウールはパシュム (Pashm: Keli phub) と呼ばれるチャンタン、ルトク産の山羊毛であり、ラダック経由でカシミールに輸出される。カシミールにおいて、これら原料は肩掛、錦織などの加工製品となり、再びラダック経由で中国領ヤルカンドへ輸出される。パシュムおよび肩掛は量、価格においてラダックの中継交易経済における主要交易品である。毛織にはこの他、ヤルカンド、コートンからのフェルト (Felt)、スクラート (Suklát) と呼ばれるラクダ毛の織物、カーペットなどが含まれる。毛皮は主として中国領からインド領への交易品となっている。ブルガー (Bulgár) と呼ばれるロシア皮、クンドゥズ (Kúnduz) と呼ばれる黒貂毛皮など、おそらくロシア産でありヤルカンド経由によるものと考えられる交易品が見られる。インド領ヌルプール (Nurpur) 産のラキ (Láki) は赤染めの山羊皮であり、ラダック、ヤルカンドにおいて需要があり、靴、馬鞆、馬飾に加工される。綿布はヤルカンドからインド領への輸出品であるが、原料の綿はインド領からヤルカンドにもたらされていることが表3から明らかにされる。絹、絹織はともに中国領からインド領への輸出品である。生糸のみならず、イリチ、コートン産の絹織、シリ (Siling) と呼ばれる絹と羊毛の混合織が見られる。インド領からはムルタン (Multán) のルンギ (Lungi) と呼ばれる絹が交易品となっている。ヤルカンドは中国と東ヨーロッパとを結ぶ交易路にあり、絹を含む交易品の中継地点となっているが、ヤルカンドからラダック経由でインドに至る交易活動においても絹が交易品目に含まれていることを指摘することができる。麻布としてはラカ (Láka) と呼ばれる大麻布が中国領からインドへの輸出品となっている。嗜好品・薬用品には多様な交易品が見られる。グル (Gúr) と呼ばれる粗砂糖はカシミールからヤルカンドへ輸出され、精製されて砂糖飴となり、再びラダック、インドへと輸出される。ヤルカンドからインドへのチャラス (Charas) と呼ばれる大麻抽出物、茶(緑茶、紅茶)、逆にインドからヤルカンドへの阿片は経済的に重要な交易品である。その他、薬用品としては、中国産の薬用植物がヤルカンドからインドへ輸出され、逆にインド産の香辛料、薬用植物などが中国領へ輸出されている。貴金属・宝石類は主として中国領からインド領へと輸出されるが、真珠だけはインドからヤルカンドへと輸出されている。

トルコ石はペルシャ産、ボカラ経由で中国領からインド領への交易品となっている。その他、石鱈、ポニー (小型馬) が中国領からインド領への輸出品となり、逆に染料として使用される藍、アオサギ羽毛飾、ヌルプール産の靴などが、インド領からヤルカンドへの交易品に含まれている。

以上、インド領と中国領との間における交易品について検討してきたが、ラダックにおける交易経済の位置をより明確にするため、ここでラダックの北方と南方にあるヤルカンドおよびカシミールという商業、手工業都市の性格について述べる必要がある。これらの都市には、カーペット、絹、製紙など中央アジア諸都市に共通する手工業が見られる。特にカシミールにおける手工業は、15世紀、カシミール王ザイン・ウル・アビディーン (Sultan Zain-ul-Abidin: Zain'l-'ābidīn 1420-1470 A.D.) がサマルカンド (Samarqand) のティムール (Timur) 宮廷における工芸に学んだものである [BAMZAI 1962: 323-324, 326]。これらはムガル帝国時代、およびアフガン統治時代にカシミールの主要な手工業となる。もっとも、それ以前からカシミールにおいては交易と商業が盛んであったと考えられる。特にマウリア朝のアショカ王 (Ashoka 268-232 B.C.)、さらにはクシャーナ朝のカニシカ王 (Kanishka 129-152 A.D.) の時代、カシミールは大帝国の一部となり、インドと中央アジアを結ぶ隊商基地となっていた。当時のカシミールの交易に用いられる国内製品としては、羊毛製品、サフラン (Saffron: 薬用, 染料, 香料), クス (Kuth:costus: 香料, 薬用), 少量の絹があったと考えられる [BAMZAI 1962: 228]。

羊毛製品がカシミールの主要交易品であったということは Cunningham, Sir A. [1854] に見られる記載と一致する。また、ショールなどの毛織手工業はムガル帝国時代およびアフガン統治時代に全盛期をむかえるが、その製品はインドをはじめあらゆる地域に送られた [BAMZAI 1962: 495-496]。その他、カシミールからインドの他地域に輸出されたものとしては、果物(生, 乾燥), サフラン, 絹糸, 馬, 木製品, 金属製品, 宝石製品などがある。これらの宝石類は中央アジアから輸入され、カシミールにおいて加工されたものである。また、中央アジア、チベットに輸出されたものとしては、サフラン, 木製品, 金属製品があげられる。逆に、輸入品としてはインドの他地域から貨幣鑄造, 装飾のための貴金属, 塩, 綿などがあり、中央アジア, チベットからは山羊毛, 羊毛布, 麝香, 水晶, ひすい, 塩, 茶, 薬用植物などがあげられる。したがって、前述したカシミールからラダック経由で中央アジアに輸出した綿は、インドからカシミールに輸入されたものであったと考えられる。このことから、カシミールもラダック同様、中央アジアとインドとの中継交易経済を基盤に持つが、さらに手工業の存在がラダックとは異なる点であることを指摘できる。同様に、中央アジアのヤルカンドについても、中継交易経済と手工業とがその経済基盤と考えられる。

以上、ラダックにおける交易商品と経済について検討してきたが、ラダック王国の交易経済の特質に関して次のことを指摘することができる。第1にラダック王国の交

易経済は中国領とインド領という、ヒマラヤ山脈北方と南方の生態的に異なる地域における、異なる生産品の交換によって成立している。第2に、ある交易品に関しては原料輸出とその加工製品の再輸入、再輸出によって成立している。たとえば、山羊毛(パシュム)はカシミールへ原料が輸出され、加工製品としての織物がラダックに輸入、通過して中央アジアへと再輸出される。また、綿の原料はインドからラダック経由でヤルカンドに輸出されるが、加工製品の綿布は中国領からインド領へと輸出される。したがって、ラダック王国の交易経済の特徴は原料輸出とともに中継交易を基盤としているということが明確になる。これを可能にしているのは、既に述べたようにラダック王国の生態的条件であるが、これに加えて中央アジアのヤルカンド、およびインドのカシミールというラダックの南北に位置する手工業都市の存在である。したがって、ラダック王国の交易経済はこれらヒマラヤ山脈の南北に位置する交易-手工業都市を結び付ける中継交易活動を機軸にしていると理解することが可能である。

(3) 交易協定

前節で明らかにされたように、交易活動はラダック王国の経済基盤として重要なものであった。したがって、交易活動に関する諸国間との政治的協定は経済-政治関係を知る上から重要な意味を持つと考えられる。特に、戦争後に締結される講和条約に交易に関する協定が含まれていることは、このことを示すものである。ラダック王統史には、モンゴル戦争後のティンスガン (*gTiñ-sgañ*) の和平協定に関する記載を見ることができる。また、プーリックのドラシナムギャルによるラダック王国の王位継承をめぐる内部抗争に発するワムレ (*Wam-le*) の調停に、交易活動に関する協定が含まれている。さらに、ラダック王国とクル王国との間における交易協定を見ることも可能である。これらラダック王国の交易協定について以下に記載と分析を行なう。

(i) ティンスガン (*gTiñ-sgañ*: *gTiñ-mo-sgañ* ティモスガン) の交易協定

ラダックのティンスガンにおける協定は、ラチェンデレクナムギャル (*Lha-chen Bde-legs-rnam-rgyal* 1660–1685 A.D.) の時代、ラサ政府により派遣されたミパムワンポ (*Mi-pham-dbañ-po*) により、チベットとラダックとの間におけるモンゴル戦争 (c. 1679–1685 A.D.) の講和条約として成立したものである。これに先立ち、ラダックはチベット-モンゴル連合軍の攻略に対抗するため、ムガール帝国下にあったカシミール太守に救済を求め、この代償としてカシミールとの間に交易協定を結ぶことを余儀なくされている。したがって、ラダック王国は、この時チベットとの間、およびカシミールとの間にそれぞれ別個の交易協定を締結していることになる。

ラダック王国とカシミールとの間の交易協定のうち、パシュミナ・ウール(山羊毛)の交易に関するものは以下の通りである。即ち、カチュル (Kha-chul: Kashmir)の特権として、ガリコルスム (mNah-ris-skor-gsum) の山羊毛は他国に販売することがあってはならない。織細毛および粗毛の混合品の価格は2 Rs. あたり80ナグ (ñag) に定める(12 ñag=lbatti=4 lb.)。チャン (Byañ) の人はロン (Roñ) のナグを使用することは許されない。チャンタンの山羊毛が土、石、水を含んでいるといわれることがあってはならない。ルトク (Ru-thog) にはラダック宮廷の商人以外の何人も立ち入ることは許されない。山羊毛の交易に関して4名のカシミール人の商人がペトゥ (dPe-thub) に駐在し、カシミールのカシミール人との間で交易を行なう。カチュルトロギャ (Kha-chul-hgro-rgya) と呼ばれる人々を除いて、いかなるカシミールのカシミール人 (Kha-chul-kha-che) もチャンタンに行くことは許されない。チャンタンに行くラダックのカシミール人 (La-dvags-kha-che) は、彼等が自ら山羊毛の荷を持ってカシミールに行くことは許されない。

以上の交易協定で決められていることは、前半ではラダックの羊毛交易に関するカシミールの独専権、交易品の価格規定、および品質規格の設定である。さらに後半では、交易商人の資格が問題にされており、原料購入に関する商人、カシミールへの原料運搬に関する商人、さらに両者の間にカシミール太守により派遣されたと考えられるラダック駐在の4名のカシミール商人が仲介する規定が設けられている。この規則は交易商人の自由な交易活動を規制し、羊毛交易における流通機構をカシミールの管轄下に置くことを目的としたものであることを指摘することができる。特に、羊毛の品質、価格規定は羊毛交易をめぐる羊毛生産者、ラダック王国、カシミール間の自由競争を抑制する専売協定であると解釈することができる。なお、ラダック王国とカシミールとの間の交易協定のうち羊毛交易以外の協定として以下のものが見られる。即ち、ラダック王はカシミール太守に対し、従順の意を表わす責任負担分として進貢を3年毎に行なうこと。また、これに付加すべきものとして、18頭の白黒斑馬、18袋の米が送られることが約束されている。

次に、ティンスガンにおける講和条約には、チベットとラダックとの間に以下の様な政府間交易に関する協定が締結されている。即ち、チベットから政府交易者が200荷の茶を持って来る。そして、ラダック王国経由でのみ矩形の固形茶が国境を越えて送られること。もし、チベットの政府交易者が毎年来ることがなければ、この約定は効力を失うこと。他方、ラダック王はロチャク (lo-phyag: 隔年の使節派遣) の際に僧職者に対して進呈を行なうこと。通常の僧侶への献品に関しては量を定めないが、

ララン (bla-brañ: ダライラマの執事) に対しては10トゥルゾ (thur-zo) の金, 10ラン (srañ) の香料(サフラン), 6片のホル (Hor) 産の綿布, 1片の柔綿布を献上すること。さらに, 交易協定以外の条約として, ラダック王国はガリコルスム地方を失い, チベットとラダックとの国境をデムチョク (bDe-mchog) のラリ (Lha-ri) 川と定めることが記載されている。チベットとラダック間の交易協定に関して, ドグラ戦争 (1834 A.D.) 以後, ラダックに滞在した Marx, K. [FRANCKE 1907: 117 note by K. Marx] は, 今日では, チベットからの政府交易は200荷の茶に代わり260荷の茶を運ぶことになっていることを記録している。しかし, 前述したように, ドグラ戦争によりラダック王国の独立が失われた後, ラダック王国からチベットへの交易は実質的にはイスラムの交易商人 Hajji Nazer Shah 一族を中心とする専業交易商人たちの手中にあったものと考えられる。

(ii) ワムレ (Wam-le) の交易協定

ラダック国王プンツォクナムギャル (Phum-tshogs-rnam-rgyal 1739-1752 A.D.) の治世, プーリックのドゥシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal) は王位継承問題から, カシミール交易者とラダック住民に対し規制を加えようと試みた。この騒動の調停がワムレ (Wam-le) における条約である。これはチベットのギャルバリンチェン (rGyal-ba-rin-chen: ダライラマ) によって派遣されたカーギュ派の僧ツェワンノルブ (Tshe-dbañ-nor-bu) を委員長とする88名の協議員により議決されたものである。協議会は王族9名, プーリック領主8名, 閣僚50名, 長老4名, 僧院長10名, ラサ政府代表1名, オブザーバーおよび証人としてカシミール羊毛交易者6名から成るものであった。羊毛交易者が含まれていることは, ドゥシナムギャルが彼等に略奪を加えたことに関する証人喚問のためであったと考えられるが, 同時にカシミールとラダックとを結ぶ交易路の途中に位置するプーリック地方における交易活動への干渉が, ラダック王国にとって重大な関心事であったことを証明するものである。このことは, 交易路に関する節で既に述べたように, プーリック地方がカシミールから大ヒマラヤ山脈のゾジ峠を越えてラダックに至る中間地帯のスル川流域を占め, カシミールとレー, およびカシミールとバルティスタン, ギルギットとの交易路の中央に位置していることに由来するものと考えられる。もっとも, この王位継承問題に関して, ラダック王統史には王位継承原則としての長男継承権が明文化されるが, 交易に関する協定についてはその記載を見ない。しかし, Gergan, S. S. [GERGAN and HASSNAIN 1977: 31-32] によれば, ワムレにおける調停交書の中に以下の様な規制処置が定められている。即ち, プーリックのドゥシナムギャルは, (1)レー, カシミール, バルテ

イスタン間における旅行者、交易者を脅迫しないこと、(2)強奪したポニーをその所有者に返却すること、(3)カシミール交易者、デリーからの交易代表団と使者に対して侵害を加えないこと、が決議されているのである。プーリックにおける交易侵害に対する規制は、先のラダック王国の王位継承権の原則、さらにラダック王国において一つの王国に2人の王は認めないという王統史の記載と合わせて考える時、プーリック地方をラダック王国の一部として規定した上で、インドと中央アジアとの中継交易に関する権利をラダック王国に限定するという政策に基づくものであると理解することができる。即ち、ワムレの調停においてラダック王国はその交易路と円滑な交易活動の遂行条件を政治的に確保したと解釈することが可能である。

(iii) ラダック (La-dvags) とクズ (Ku-zu; クル: kulu) の交易協定

ラダック王国とヒマラヤ南部のクル王国との間における交易協定に関しては、クルのドルンドルブ (Drun-drub) による記事 [FRANCKE 1907: 221-224] からその概要を知ることが可能である。交易品はラダック産の硫黄とクル産の鉄であり、これらの交換に関する協定が述べられている。交易の経緯は以下の通りである。ガルツァ (Gar-sa) はチベット人 (Bod-pa) によって治められていたが、クズ (Ku-zu) のある王が征服し、これ以後毎年、クル王はラダック王に鉄を送り、逆にラダック王はクル王に硫黄を送るという約束がなされたという。ここに登場するガルツァとはラホール (Lahul) のことであるが、時にチャンドラ (Chandrā) 溪谷、バガ (Bhāgā) 溪谷のみを示すこともある。一方、両溪谷はメロク (Me-rlog) とも呼ばれる。またクズ (Ku-zu) とはクル (Kulu) のブナン (Bu-nan) 語である [FRANCKE 1907: 223]。クル王はガルザの住民に対し租税の代わりに毎年1バティ (ba-ti) の鉄をラダック王に与えるように命じた。バティ (ba-ti: Battis) とはヒンディ語に由来するラダックの重量単位で2インドシアーズ (1 seer ≒ 2 pound) に相当する [CUNNINGHAM 1854: 253-254]。ガルザとメロク (Me-rlog) の住民は各々、クルから鉄を買い、これを運搬せねばならなかった。ラダック王の使者がガルザに到着すると、人々は世帯毎に1バティの鉄とそれを包む古い袋を持って集まり、これをリンティ (Liñ-ti) まで運搬した。バガ (Bhāgā) の左岸にあるカルダン (Kar-dañ: mKhar-dañ) から出発し、100人夫荷以上が毎年搬出された。彼等はリンティにおいて、今度は荷をラダックの人々によりそこまで運搬されて来た硫黄に代え、キーラン (Kye-[g]lañ) まで戻った。一方、ラダックの人々はリンティから鉄をラダックに持ち帰った。硫黄はキーランからは村落間の奉仕によりクズ (Ku-zu) まで運搬された。この交易がいつから始まったかは明らかではないが、1830 A.D. 生まれのクルのドルンドルブ (Drun-drub) が

13歳になるまで交易運搬の役に従事していたという事実から、1845 A.D. に至るまで、即ちドグラ戦争以前から以後に至るまで続けられていたことは確かであろう。

なおこの交易使者であり、運搬者の監督にあたるラダック人はフォーナ (Pho-ña) と呼ばれ、世襲的地位にあった。ラダックのシェー (Ścl) には、ツェワンパルチョ (Tshe-dbañ-dpal-hbyor)、ドントルプトラシ (Don-grab-bkra-śis)、ツェリンプンツォク (Tshe-rin-phun-tshogs) という3代に渡るフォーナが居り、彼等はピティ (dPe-ti: sPyi-ti)、カルチャ (dKar-cha: Lahul)、ニュンティ (Ñuñ-ti: Kulu) まで行き、ラダックからの硫黄を運搬し、帰りにはラダックに鉄を運んだ。

以上の記載から明らかにされることは、この交易は講和条約の性格を持った王国間の公式の交易協定であるということである。ラダックとクルの間の交易協定は、それぞれの王国における国内生産物の相互交換という特徴を持つ。これは均衡のとれた交易協定であるかのように見えるが、あくまでもクル王によるガルザ地方の征服という事実の上に成立しているものである。この意味で、モンゴル戦争後に締結されたチベットとラダックとの間の政府間交易と類似するものである。即ち、後者においては、チベットからラダックに茶を運び、逆にラダックからは種々の贈物をチベットの僧職に献じるという相互規定があるが、その背景にはガリコルスム地方をチベットに帰属させるという戦争終結条件が規定されているからである。さらに、カシミールとラダックとの間にも、ラダックからの馬、麝香、ヤク尾、およびカシミールからの米という国内生産物の交換規定があるものの、これらはカシミールによる羊毛交易の独占権、さらにはラダック王のイスラム改宗というカシミールの条件の受諾の上に成立するものである。即ち、王国間の講和条約に見られる政治的関係を背景として考えれば、これらの交易協定は国内生産物の相互交換という特徴と同時に、貢献という王国間の儀礼的交換としての意味を持つものであると理解することができる。

3. 政治機構

ラダック王国の政治機構は王朝、宰相をはじめとする官僚、教会により構成される。この章では、ラダック王国の政治機構について王朝、官僚、王朝と官僚との関係について記載、分析を行なう。教会および教会と王朝との関係については次章の宗教機構の項目のもとにあらためて取り上げることにする。

(1) 王 朝

ラダック王統史はキデニマゴン(sKyid-lde Ņi-ma-mgon c. 900–930 A.D.) からロトロチョクダン (Blo-gros-mchog-ldan c. 1440–1470 A.D.) に至る第1次王朝、ラチェントラクパブム (Lha-chen Grags-pa-hbum c. 1400–1440 A.D.) からツェワンラプタンナムギャル (Tshe-dbañ-rab-brtan-rnam-rgyal c. 1830–1835 A.D.) に至る第2次王朝の諸王について記載している。第1次王朝と第2次王朝とは年代的に重複し、実質的な交替があったのはc. 1470 A.D. のラチェンバガン (Lha-chen Bha-gan c. 1470–1500 A.D.) の時であったと考えられる。王統史は、彼について戦いを好む王であると記し、彼とシェー(Śel)の人々はレーの王ラチェントラクブムデ(Lha-chen Grags-hbum-lde c. 1400–1440 A.D.) の息子達に敵対したと述べる。即ち、ラチェントラクブムデの息子でありラダック第1次王朝最後の王であるロトロチョクダン (Blo-gros-mchog-ldan c. 1440–1470 A.D.) は彼の父の弟の孫にあたるラチェンバガンに王位を奪われたということになる。これら諸王はいずれも系譜によって結ばれた世襲制のもとにあり、Gyal-po (勝利者; rGyal-po-chen-po: 勝利者-偉大者) と呼ばれ君主としての地位を占める。ラダック王国第1次王朝の諸王の名前は長男の王位継承者の名前に冠せられるラチェン (Lha-chen: 神-偉大) を伴う。第2次王朝諸王については名前の後にナムギャル (rNam-rgyal: 完全-勝利) が付記されるが、これはナムギャル王朝の系譜を明確にするものと考えられる。もっとも、第2次王朝諸王については継承をめぐる抗争のため、必ずしも長男が王となっていない。しかし、プンツォクナムギャル (Phun-tshogs-rnam-rgyal 1739–1752 A.D.) の治世におけるワムレ (Wam-le) の調停 (1752 A.D.) 以来、ラダック王国における王位継承規則として、王位は長男が継承し弟は僧侶になることが定められるに至る。もっとも、長男による王位継承は既にラダック王国における理念的原則であったと考えられる。たとえば、キデニマゴン (sKyid-lde Ņi-ma-mgon c. 900–930) は3人の息子のうち長男のラチェンパルキゴン (Lha-chen dPal-gyi-mgon c. 930–960 A.D.) に上下ラダック地域を含むガリ (mŅah-ris) のマルユル (Mar-yul) を与えている。また第2次王朝のセンゲナムギャル (Señ-ge-rnam-rgyal c. 1590–1635 A.D.; cf. 1569–1595 A.D.) の王位についても、3人の息子の中で長男のデルダンナムギャル (bDe-ldan-rnam-rgyal c. 1620–1645 A.D.; 1594–1659/60 A.D.) によって継承されている。さらに、ラチェンデレクナムギャル (Lha-chen Bde-legs-rnam-rgyal 1660–1685 A.D.) には5人の息子があったが、王位を継承するのは長男のラチェンニマナムギャル (Lha-chen Ņi-ma-rnam-rgyal 1685–1720 A.D.) であり、さらにこれは長男である第1王

妃との間の息子のデスキョンナムギャル (bDe-skyoñ-rnam-rgyal 1720–1739 A.D.) により継承されるに至る。

しかし、以上述べたことから明らかなように、次男以下の相続権が全く認められていなかったわけではない。前記最初の例にあげたニマゴンの次男のドラシゴン (bKra-sis-mgon) には王位継承者の称号であるラチェン (Lha-chen) を冠せられることはなかったが、プラン (Pu-hrañs), グゲ (Gu-ge) 地方を与えられ、また三男のデックゴン (lDe-gtsug-mgon) にはザンカルゴスム (Zañs-dkar-sgo-gsum), ピティ (sPi-ti), ピチョク (sPi-lcogs) 地方の支配権が与えられているとの記載が見えるからである。

このことは、第2次王朝 センゲナムギャルの次男であるインドラボティナムギャル (Indrabodhi-rnam-rgyal) がグゲの支配権を得、また三男テムチョクナムギャル (bDe-mchog-rnam-rgyal) がピティとザンカルとを与えられていることと同様である。これらの地域はいずれもインダス河本流域の上下ラダックを中心とするラダック中央部ではなく、その南方と東南方に位置する辺境地方領地であるが、次男以下にこれら領地の支配権が与えられ、そこが小独立王国として存続していたことは事実である。特に、ラダック王国成立初期、あるいはセンゲナムギャルの治世に見られるような領土拡大期に、領地の分割支配制は可能であったことを指摘したい。しかし、モンゴル戦争 (c. 1679–1685 A.D.) 後のラダック王国の領土縮小期になると、領地の分割は困難になったと考えられる。それにもかかわらず、ニマナムギャルの2番目の王妃ズィズィカトゥン (Zi-zi-kha-thun) は息子のドラシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal) の王位継承に失敗すると、彼にプーリックの支配権を与えることになる。さらに、彼は武力行使をもってザンカルをも支配下に置き、交易活動に規制を加えることにより経済的にもラダック王国に敵対を試みる。この事件は王国の弱体化に伴う地方領主のラダック王国に対する王位継承権をめぐる内部抗争であると促えることも可能である。したがって、この抗争に関するワムレ (Wam-le) の調停において定められる王位継承規則は、ラダック王国における領地分割規制による地方勢力の牽制と、内部分裂の防止処置という機能があったと解釈できよう。特に、次男以下は僧侶となることという規則は、きわめて厳格な継承権の規定であり、ラダック王国の統一維持にとって有効な方策であったと考えられる。

以上、述べたようにラダック王国の王朝は世襲制であり、王国の統治権を持つものである。この意味でラダック王国は専制国家的形態をとるが、実質的な統治機構においては必ずしも王権が絶対ではなかったと考えられる。その理由は、ラダック王朝の

政治権力を牽制する要因として以下のものを指摘することができるからである。即ち、第1に地方領主の存在である。たとえばヌブラ (Nub-ra), ギャ (rGya), ピティ (sPi-ti: dPi-ti), ザンカル (Zaṅs-dkar), パスキュム (Pas-kyum), ソス (So-th), スル (Su-ru), ヘンバブ (Hem-babs: Dras) においては、かつての独立領主がおり [CUNNINGHAM 1854: 258], 彼等はラダック王と同様 rGyal-po の称で呼ばれる。第2に、これと関連するが、ラダック王国の官僚、特に宰相の政治権力の強さをあげることができる。第3に教会勢力の存在を考察することができる。以下、これらについて考察する。

(2) 官 僚

ラダック王国における実質的な政治権力はカロン (bkah-blon) と呼ばれる貴族の家系から出た宰相 (dbang-kyi-bkah-blon) にあったと考えられる。吐蕃王国における論菫 (大論: blon-che) に相当する権力を持つものと思われ、吐蕃の官制はラダック王国のそれとは同一ではないと考えられるが、論菫はツェンポ (btsan-po) の下にある中央政府である九大尚論 (shan-blon-ched-po-dgu) のうち政治の中枢職であり、対外戦争にも軍指令官として出動している [佐藤 1959: 719-720] という。blon は本来、語る者 (事) を原義とし blon(po) は忠告者、相談相手となり、吐蕃語にあっても官吏を示し、特に高級官吏、大臣を指す [佐藤 1959: 727]。彼等はかつての小王 (rgyal phran) であり、吐蕃国家が興隆すると、その家来 (bangs) になり、功を競って側近の王 (sku rgyal) になろうとし、国家の体制が整うと大臣 (blon chen) にして枢機に参画するもの (bka' la gtogs pa) であろうとし、こうして生き延びたものの一族に対して blon の位が許された [山口 1983: 538]。ラダック王国において、宰相は常に王朝の財務担当の任を持ち [CUNNINGHAM 1854: 257], 王国衰退期にあっては長老、教会、官僚の決定をもって王を軟禁し、あるいは王朝の存続を左右するだけの権力を持っていた。これに関してラダック王統史には次の様な記載がある。即ち、ツェパルミギユルドントルップナムギャル (Tshe-dpal-mi-hgyur Don-grub-rnam-rgyal 1808-1830 A.D.) が宰相の私印を持ち去り、王自ら村長、領主などの意見を求めたことが非難の対象とされていること。さらに、宰相ツェワンドンルップ (Tshe-dbañ-don-grub) の智恵により隣国と手紙、贈物の交換がなされ、友好関係が保たれたことである。以上のことから、ラダック王国において宰相は内政、外交におよぶ実質的な政治権力を持っていたことを指摘することが可能である。

宰相の下にある官僚組織として、町にはロンポ (blon-po: 忠告者) が置かれてい

る。Cunningham, Sir A. [1854: 259] は、これを知事と訳している。砦にはカルボン (mkhar-dpon: 砦-長, 司令官) が置かれる。さらに、各村にはミボン (mi-dpon: 人-長) あるいはゴバ (hgo-ba: 頭-長; grong-dpon: 村-長) が置かれ、また地域ごとにショガムパと呼ばれる関税吏が居る。ゴバは犯罪事件、および租税上納に関して当該地域のカロンのあるいはギャルポに直接義務を負う。しかし、ある町においてはミボンがレーに居るチャクゾー (phyag-mdsod: 御手-宝庫, 財務官) に直接、租税の上納を行ない、チャクゾーはこれを宰相に提出する [CUNNINGHAM 1854: 259-260]。もっとも、Petech [1977: 155, 158] は財務官あるいは大蔵大臣 (phyag-mdzod: チャクゾー) が宰相と同等の地位にあり、原則として両職は分離していたと考えている。ただし、ツェワンドントルップ (Tshe-dbañ-don-grub) は例外的に両者を兼任していたという。宰相職は単独であり、ラサの神権政体に見られる様な連合体 (lhan-rgyal) は見られない。またチャクゾー (phyag-mdzod) は各地区における税吏であるナンソー (nañ-so) により徴収された税収入を管理し、ラダック全域の経済資源の統制を行っていたと考えられている。

ラダック王国のレーには、マクボン (dmag-dpon: 軍隊-長, 司令長官) が居る。前記のチャクゾーを Cunningham, Sir A. [1854: 259] は大蔵大臣と訳している。さらに、ショガム・チャクゾー (関税務官)、シャクボン (gshags-dpon: 司法長官)、トリムボン (khrims-dpon: 法-長)、カカルタズィ (ga-ga-rta-rdsi: 殿-馬番) と呼ばれる馬番長、チャクシ・ゴバと呼ばれる市長に相当するものが置かれている。

司法制度に関しては以下の様に考えられる [CUNNINGHAM 1854: 262-263]。即ち、原告はその被害状況を当該地域のギャルポもしくはカロンの、あるいは村のゴバに陳述する。5名あるいは7名の長老 (rgad-pa) により審議が行なわれる。首都レーにおいては、原告はロンポに陳述を行ない、これは宰相に報告される。そこで5名あるいは7名の審議員から構成される法廷がシャクボン (gshags-dpon: 司法長官) により召集される。審議員は長老の中から選ばれるが、これに2名以上のトリムボン (khrims-dpon: 法-長) が加わる。彼等の義務はユルトリム (yul-khrims: 土地-法) の解釈を行なうことにある。刑罰には、むち打ち、科料、投獄、そしてまれに死刑が含まれる。この司法制度に関して、ラダック王統史には以下の記載が見られる。即ち、ラチェンニマナムギャル (Lha-chen Ñi-ma-rnam-rgyal 1685-1720 A.D.) が裁判において、国家役人、各村から任命された見識ある長老によって構成される評議会を設けたということである。このことから、当時、裁判制度の確立が行なわれたことを認めることができる。

(3) 王朝と官僚の関係

前節で明らかにされた王朝と官僚、特に宰相の性格に基づき、ここではラダック王国における税収およびその配分、両者の政治権力について述べ、王朝と官僚との関係を考察する。

ラダック王国における税には、輸出入交易品に課せられるショガムと呼ばれる関税と、家屋に課せられるトール (khral:thañ: dPya) と呼ばれる租税とがある。前者については交易経済の項で述べたが、後者についてはラダック王国における24,000戸のうち寺院の維持のため譲渡された4,000戸、王妃と王朝の維持のための1,000戸、および王自身の所有する村の1,000戸を除いた18,000戸が課税の対象となり、徴税総額は30,000 Rs. [CUNNINGHAM 1854: 269-270] となる。

関税による収入は18,000 Rs. あり、その他、国内交易、国際交易仲買人から5,700 Rs. の税収があり、またカロン、ロンパ、カルボンなど官僚から王への贈物として5,000 Rs. 相当の収入が見込まれる。したがって、租税と関税の合計は58,700 Rs. [CUNNINGHAM 1854: 271] となる。歳出として、関税および仲買人に対する徴税額の半分は宰相の特権となる。したがって、11,850 Rs. が宰相の収入であり、46,850 Rs. が国王の収入となる。その他の役人の給料は計20,000 Rs. である。しかし、王および主だった国家役人は関税免除の特権を与えられており、実収入はさらに増えると考えられる。したがって、国王の年間収入は100,000 Rs. (£10,000 stg.) [CUNNINGHAM 1854: 271-272] と見込まれている。また、軍事費支出はないが、これは必要時に各戸より男子1名の兵士が自己負担により徴兵される制度によるためである。以上述べたようにラダック王国の国家歳入の大部分は王の利益となり、これに続いて宰相の利益となることが理解される。特に、官僚に対する関税免除の特権により、彼等は交易活動による多大な利益を付加することが可能であると考えられる。

次に、ラダック王国における王朝と官僚、特に宰相との政治権力に関する関係について考察する。ラダック王統史には、内政に関する政府官僚の発議権に関する記載を見ることができる。これらはいずれもラダック王国衰退期におけるものである。たとえば、デスキョンナムギャル (bDe-skyoñ-rnam-rgyal 1720-1739 A.D.) の治世に起こる王位継承問題に関し、第2王妃の息子であったドラシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal) が王位継承権を要求したのに対し、官僚、長老評議会はドラシナムギャルは僧侶となるか、さもなければティンスガン (gTiñ-sgañ) 王宮に住まうよう要求している。ティンスガンはラダック中央部の首都レーから離れた下ラダックに位置する。即ち、ドラシナムギャルがラダック王となることは反対されたということである。

また、プンツォクナムギャル (Phun-tshogs-rnam-rgyal 1739–1752 A.D.) の時期に行なわれたワムレ (Wam-le) の調停の委員会は、僧ツェワンノルブ (Tshe-dbañ-nor-bu) を委員長とする王族9名、プーリック領主8名、官僚50名、長老4名、僧院長10名、ラサ政府代表1名、証人6名の計88名の構成員から成り、王位継承規則を制定するというように、ラダック王国の統治権が、王朝よりも官僚や教会の合議に依存していることを指摘することができる。ツェワンナムギャル二世 (Tshe-dbañ-rnam-rgyal 1752–1782 A.D.) の治世には、王の婚姻の破棄、再婚、軟禁に至る決定が長老、教会、閣僚により行なわれ、兵士の動員をも伴っている。ツェパルミギェルドントルップナムギャル (Tshe-dpal-mi-hgyur Don-grub-rnam-rgyal 1808–1830 A.D.) の治世になると、王が自ら村長、領主などに意見を求めたことを、ラダック王統史は古き良き習慣を破壊するものであると記載するに至る。ラダック王国最後の王であるツェワンラプタンナムギャル (Tshe-dbañ-rab-brtan-rnam-rgyal 1830–1835 A.D.) に関しては、官僚、長老評議会、領主、教会などの請願により、宰相ツェワンドントルップ (Tshe-dbañ-don-grub) の娘カルザンドォルマ (bsKal-bzañ sGrol-ma) との結婚が行なわれる。これはカロンである宰相と王朝との姻戚関係による宰相の政治権力の拡大を目的としたものであると解釈できる。しかし、この試みは結果的には成功していない。なぜなら、ラダック王統史には続けて、王がパスキュム (Pas-kyum) 王宮のソナムパルキッド (bSod-nams-dpal-skyid)、さらにゾラカトゥン (Zo-ra-kha-tun) と結婚し、さらに、宰相が死亡すると、王と王妃は閣僚に干渉を加え、ラダック各地の領主間の対抗が生じたことが記載されているからである。

もっとも、ラダック王国第2次王朝前半期のセンゲナムギャル (Señ-ge-rnam-rgyal c. 1569–1594 A.D.) は国王と宰相とを例外的に兼ねていた [PETECH 1977: 154] という。この時期はラダック王国発展期であり、領土拡大期にあたり、前述した衰退期と比較すれば、国王の統治権はより強大であったと考えることができる。

王朝と官僚との対立関係の背後には、宰相を選出する各地域のカロン間の抗争をも想定することが可能である。これについて、ラダック王統史は何も記してはいないが、宰相が地方領主であるいくつかのカロンの家系の一つから選出され、それは国王による嗜好、人望、能力に基づくものであり、またその堅固な権力支配により一度宰相の任につくと数世代に渡りその地位を保持することが可能であるということ [CUNNINGHAM 1854: 258] から引き出せる結論である。したがって、上に述べた王朝と官僚との対立関係とは、ラダック王国の実質的な統治権の弱体化に伴う、王朝をめぐる地方領主間の抗争に他ならないと考えることができる。

4. 宗教機構

この章ではラダックにおける宗教の歴史的背景およびその政策的側面について考察する。特に、教会とラダック王朝との関係についてラダック王統史の記載に基づき、宗教-政治間の関係という視点から分析を行なう。

(1) 宗教の歴史的背景

(i) 寺院と宗派

ラダックにおいて現在見られるチベット仏教諸宗派は、ゲールク派 (dGe-lugs-pa)、カーギュ派 (bKah-brgyud-pa)、サキャ派 (Sa-skya-pa)、およびニンマ派 (rÑiñ-ma-pa) である。カーギュ派にはディグン派 (hBri-guñ-pa) とドック派 (hBrug-pa) がある。これらはいずれも15世紀以後、中央チベットから入ったものであり、それ以前はリンチェンザンポ (Lo-chen Rin-chen-bzañ-po)、アティーシャ (Atisa) などインド仏教の影響の強いカダム派 (bKah-gdams-pa) に属していたものと考えられる。以下、ラダックに現存する寺院につき、その宗派別に成立の背景を検証する。

① ゲールク派 (dGe-lugs-pa) 寺院

ラダックにあるゲールク派の寺院はペトゥ (dPe-thub: sPi-thug) 寺院、ティクセ (Khrig-se: Khri-gs-rtse: Khri-rtshe) 寺院、ルキル (Klu-hkhyil: Klu-dkyil) 寺院が主たるものであるが、その他、アルチ (A-lci) 寺院、リゾン (Ri-rdzoñ) 寺院などが含まれる。

ペトゥ (dPe-thub) 寺院の正式の寺院名はサムテンリン (bSam-gtan-gliñ: 禪定寺) であり多羅菩薩を祭る [酒井 1979: 12] が、伝説によれば11世紀僧ランチュブウの兄であるウデにより建立され、その後、リンチェンザンポにより僧院としての形態をとるに到る。したがって、本来、カダム派に属していたことになるが、ラダック王国トラクブムデ (Grags-hbum-lde c. 1400-1440 A.D.) の治世、僧ラワンロトロ (Lha-dbañ-blo-gros) により再建され、ツォンカパの教義、即ちゲールク派が導入された [THUPSTAN PALDAN 1982: 15] ということである。ペトゥ寺院の末寺としてレーのサンカル寺院、ストックのグルブック寺院、サブのタシゲペル寺院が含まれる。これら寺院の儀軌や作法等は中央チベットのタシルンポ (bKra-sis-lhunpo) と同じであり、留学僧はタシルンポやデブン (hBras-spuñs) 寺のロサリン (Blo-gsal-gliñ) 等に行くことになっており、これは後述するティクセ寺院、ルキル寺院の場合と同様である [ツルテム・ケサン 1981: 104-105]。

ティクセ (Khrig-se) 寺院はツォンカパの予言により弟子のシェラ・ザンポ (Śes-rab-bzañ-po) がティクセ谷の頂上に堂を建立し、後にシェラ・ザンポの甥のパルダン・シェラブがここに寺院を建立し 1447 A.D. 僧院が開始されたとされる [THUPSTAN PALDAN 1982: 18-19]。

ルキル (Klu-hkhyil) 寺院は別名ガルダンドルゲーリン (dGah-ldan-dar-rgyas-gliñ: 大極楽寺, cf. Klu-hkhyil: 龍卷寺) [酒井 1978: 13] という。伝説によるとその創建は古く、ラダック国王ラチェンギャルポ (Lha-chen-rgyal-po c. 1050-1080 A.D.) が僧ワンチョジェーに対して 1065 A.D. に奉獻したとされる。寺院の両側は川により囲まれ、これらは各々 Naga-raja Nando (Kṛiṣṇa: 黒龍) および Taksako (Tokṣaka: 徳叉迦龍) とされる。15世紀にツォンカパの弟子カトラップジェ (mKhas-grab-rje 1385-1438 A.D.) の更に弟子のラワンロトロ (Lha-dbañ-blo-gros) が寺院の繁栄に努め [THUPSTAN PALDAN 1982: 11; ツルテム・ケサン 1981: 105], ゲールク派が導入されるに至る。

アルチ (A-lci) 寺院はルキル寺院の末寺であるが、成立はリンチェンザンポに帰され11世紀後半のこと [SNELLGROVE & SKORUPSKI 1977: 15] と考えられる。アルチ・チョーコル (A-lci-chos-bskor), 即ち転法輪寺は三層の本堂と5個の仏室を持つ [酒井 1978: 12]。Vairocana を主尊としインド仏教の伝統が見られ、建築様式にはカシミールの影響が指摘される [SNELLGROVE & SKORUPSKI 1977: 16]。したがって、アルチ寺院は本来カダム派に属し、後にゲールク派に移行したものと考えられる。リゾン (Ri-rdzoñ) 寺院は 1842 A.D. にツォンカパの教義に基づいて僧ツルテム・ニマが建立した。ヴィナヤ (Vinaya) 戒律の実践を行ない、經典、衣服以外の僧侶の個人所有を認めず、ラダックにおける最も戒律の厳しい寺院である。尼寺が下流にあり、リゾン寺院と供に自給自足の生活を行なう [THUPSTAN PALDAN 1982: 13-14]。なお、この戒律は中央チベットのラサにおいてガルダン (dGah-ldan) の第7世管長、ロトコタンパ (Blo-gros-brtan-pa 1402-1476 A.D.) の創設したタグポ (Dvags-po) 地方のトッザン (Gra-tshan) 等にあったといわれる [ツルテム・ケサン 1981: 106]。

② ディグン・カーギュ派 (hBri-guñ-pa bKah-brgyud-pa) 寺院

ラダックにあるディグン・カーギュ派に属する寺院はラマユル (Bla-ma-gyur) 寺院とチワン (Phyi-dbañ) 寺院である。ラマユル寺院の正式名はユンドルン (Yun-druñ: Svastica: 吉祥字) 寺院である。ここはナローパ (Nāropā) とリンチェンザンポによるカダム派に属していたと考えられるが、16世紀ラダック国王ジャムヤンナム

ギャル (hJam-dbyaṅs-rnam-rgyal c. 1560–1590) が、チョスジェダンマクンガトクパ (Chos-rje lDan-ma Kun-dgah-grags-pa) をラダックに招き、寺院を奉獻し、ディグン派を開始した [THUPSTAN PALDAN 1982: 10] とされる。もっとも、僧ダンマを招いたのは、在位年代から考えてラダック国王ドラシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal c. 1555–1575 A.D., Petech; cf. c. 1500–1532 A.D., Francke) である [PETECH 1978: 324] と考えられる。

チワン (Phyi-dbañ) 寺院についても、前者と同様に16世紀ディグン派の僧チョスジェダンマクンガトクパに与えられたものであるとされている。この寺院はガンゴン (sGañ-sñon) のドラシチェザン (bKra-sis-chos-rdzon) と呼ばれ、ラダックにおける最初のディグン派に属する僧院である。ディグン派の本山 (gDan-sa-thil) はショップパジグテンゴンポ (Shop-pa-hjig-rten-mgon-po 1143–1217 A.D.) により、1178 A.D. に創設され、中央チベットにある。一番位の高い僧の下に30名くらいの僧侶がいるとされ、ラダック僧院長はその一人である [ツルテム・ケサン 1981: 102]。ディグン・カーギュ派は教義、調息法 (rtsa-rluñ), 声明 (hdon-lta-dbyaṅs), 舞い方等の作法、儀軌による供物の作り方等、独自の特徴を持つ [ツルテム・ケサン 1981: 102] とされる。

③ ドック・カーギュ派 (hBrug-pa bKah-brgyud-pa) 寺院

ラダックにおいてドック・カーギュ派に属する寺院はヘミ (He-mi) 寺院、スタクナ (sTag-sna) 寺院などである。ヘミ寺院はチャンチュブチョーリン (Byan-chub-chos-gliñ: 菩提法寺) あるいはサンガクチョーリン (gSañ-sñags-chos-gliñ: 真言法寺) [酒井 1978: 11] と呼ばれる。ラダック王統史によれば、ラダック王センゲナムギャル (Señ-ge-rnam-rgyal c. 1590–1635 A.D., FRANCKE; cf. 1569–1594 A.D., GERGAN) が僧タックツァンラチェン (sTag-tshañ-ras-chen) を招いたのに始まる。この宗派はブータンで栄え、ラダックにおける根拠地はこのヘミ寺院 (1602–1642 A.D. 創建) である [STEIN 1971: 78]。ヘミ寺院の僧テチョクワン (Theg-mchog-dbañ: Mipan Tsewang) の時、ヘミツェチュ (He-mi-tshes-bcu) と呼ばれるパドマサムバヴァ (Padma-sambhava) に献ぜられる祭礼が導入された。ラダック国王の保護のもとに栄え、土地、財産等の所有に関してラダックで最も裕福な寺院である。

チデ (Chi-mde) 寺院、ワムラ (Wam-la) 寺院はヘミ寺院の末寺である。チデ寺院にはパドマサムバヴァの聖像がある。ワムラ寺院は伝説によれば、その起源は古くリンチェンザンポの時代に遡るとされ、11頭を有すアヴァロキテスヴァラ (Avalokitesvara) 像、ブッダ (Buddhas), ボディサッタヴァ (Bodhisattvas) の壁画の他、ア

ティーシャ (Atisha) の聖像がある [THUPSTAN PALDAN 1977: 11]。

スタクナ (Stag-sna) 寺院はラダック王ジャムヤンナムギャル (hJam-dbyaṅs-rnam-rgyal c. 1560–1590 A.D., FRANCKE) が、ブータンから僧チヨスジェジャムヤンパルカルを招き、師として仰ぎ、土地、財産を与え、c. 1580 A.D. に建立したものとされる。寺院にはカムルップ (Kamrup: Assam) 将来のアヴァロキロスヴァラ (Avalokitesvara) の聖像がある [THUPSTAN PALDAN 1977: 20]。その他、ドック派に属する3名の僧、即ち、パドマカルポ (Padma dkar-po), ガクワンナムギャル (Ñag-dbañ-rnam-rgyal: 17世紀のブータンの僧), ガクワンギェルツェン (Ñag-dbañ-rgyal-mtshan) の聖像 [SNELGROVE & SKORUPSKI 1977: 131] も安置されている。

④ サキヤ派 (Sa-skyā-pa) 寺院

サキヤ派は中央チベットにおいて、クンチョクゲルポが1073 A.D. にサキヤ (Sa-skyā) 寺院を創設したのに始まる。ラダックにおいてサキヤ派に属する寺院はマトロ (Ma-spro) 寺院である。15世紀に僧ダウンパドルジェにより建立された [THUPSTAN PALDAN 1977: 19]。サキヤ派は中央チベットにおいてはモンゴル帝国と結び付いて勢力を拡大したが、ラダックにおいては一寺院を確保したにとどまる。

⑤ ニンマ派 (rÑiñ-ma-pa) 寺院

チベットのカム地方においてはヴァイローチャナの伝えるパドマサムバヴァの法系があり、これはニンマ派 (rÑiñ-ma-pa) に属し、ゾクチェン派 (rDzogs-chen) という一派をなす [STEIN 1971: 65]。しかし、ラダックにおいては、ニンマ派は先のサキヤ派と同様、比較的后になって入ることになる。ラダックにおいてニンマ派に属する寺院はトラクテク (Phrag-theg) 寺院である。伝説によれば、寺院の建立される以前にクンガプンツォクと呼ばれる僧の瞑想のための洞窟があったとされるが、ラダック国王ツェワンナムギャルⅡ世 (1752–1782 A.D.) の治世、ツェワンノルブ (Tshe-dbañ-nor-bu) がカム (Khams) からラダックに来てニンマ派を導入した [THUPSTAN PALDAN 1977: 22] とされる。

(ii) 歴史的位罫

紀元前5世紀ガンジス河中央部マガダ (Magadha) 国に始まる仏教は、紀元前3世紀にはアショカ (Aśoka) 王の保護を受けてその帝国下にあったインド各地に広まる。その後、インド北西部において、仏教はクシャナ朝 (Kushāna: 1 c. B.C.–5 c. A.D.) の保護のもとにガンダーラ (Gandhāra) を中心に繁栄し、ここから中央アジア、中国へと伝播することになる。

5世紀には中央アジアからのフン(Huns)の侵略を受けクシャナ朝は倒れる。しかし、カシミールの王 Lalitāditya-Muktāpida (c. 725–756 A.D.) は覇権の復興をかり、ヒンドゥー教と仏教の振興に努める。ラダックに仏教が伝播したのは、おそらくクシャナ朝の時代からと推測され得るが、カシミールの影響が明瞭に現れるのは8世紀 [SNELGROVE & SKORUPSKI 1977: 6–8] になってからである。この初期仏教の特徴はチベットを經由した仏教、即ちチベット仏教ではなく、インドからの直接の影響によるインド仏教であるという点にある。

チベットにおいては、ソンツェンガムポ (Sroñ-btsan-sgam-po 600–649 A.D.?) の時代に仏教の国教化が計られたとされる。もっとも、7世紀のこの出来事は史実というよりも、むしろ仏教受容とチベットの国家的英雄とを結びつけた神話的性格の強いものである [MACDONALD 1984: 129–140] と考えられる。しかし、ティデツックツェン (Khri-lde-gtsug-brtsan 704–755 A.D.) の時代になると、政府閣僚の一部の反対にもかかわらず仏教を受容することへの努力がなされる。さらに、彼の息子のティソンデツェン (Khri-sroñ-lde-brtsan 755–797 A.D.) の時代には、インドから招聘されたパドマサムバヴァ (Padma-hbyuñ-gnas: Padma sambhava) のもとにチベットにおける仏教振興が計られる [TUCCI & HEISSIG 1970: 14] ことになる。チベットにおける仏教国教化に伴い中国からのチャン (Ch'an) 派を擁護するワシャン (Hwa-shang) と、インドからのサンタラクシタ (Santaraksita) 派を擁護するサル・ナン (gSal-snañ) との間の抗争があったものの、ラルパチェン (Ral-pa-can: Khri-gtsug-lde-brtsan 815–838 A.D.) 以後、チャン派の勢力は衰退する [TUCCI & HEISSIG 1970: 17–18]。こうして、仏教はチベット国教となるが、在来のボン (Bon) 教との間には教義的、政治的抗争が続いたものと考えられる。インドからの仏教は在来の神々、儀礼を取り入れ、ボン教との融合を計る。しかし、チベットにおける仏教確立の試みはランダルマ (Glañ-dar-ma 838–842 A.D.) による破仏により中断し、チベットにおける仏教の第1次伝播は終りを告げる。

ランダルマの死後、チベットの政治的統一は失われ、地方勢力の分立の時代となる。ラダック王統史によれば、ラダック王国最初の王朝はランダルマの孫にあたるキデニマゴン (sKyid-lde Ņi-ma-mgon c. 900–930 A.D.) に始まるとされる。彼は中央チベットを追われ、プラン (Pu-hrañs) のニズン (Ņi-zuns) に都を定め、その後、ルトク (Ru-thogs), グゲ (Gu-ge), プラン (Pu-hrañs) を含むガリコルスム (mÑah-ri-skor-gsum) と呼ばれる西チベット地方を征服する。

仏教の第2次伝播は西チベットに起こる。10世紀当時、北西ネパールにおいてカシ

ア (Kha-sia) 族に属するマラ (Malla) 王朝が力を持ち、首都をセムジャ (Semja) に置き、ここからプランを支配していた [TUCCI & HEISSIG 1970: 35]。この王朝のコルレ王は弟ゾンゲに位を譲り、イエシェウ (Ye-shes-'od) の名のもとに出家する [STEIN 1971: 64]。彼は僧院の規律と仏法の再興のために若者をカシミール (Kashmir) に送り、仏教を学ばせた。当時、カシミールは仏教の理論と実践に関する伝統を保持していたからである。リンチェンザンポ (Rin-chen-bzañ-po 958-1055 A.D.) はこれら留学僧の中の一人であった。彼はグゲ (Gu-ge) の王の支配地を中心に多くの寺院を建立し、またカギユル (bKah-hgyur)、タンギユル (bsTan-hgyur) を含む多くの仏典の翻訳を行なった。グゲのキタン (Khyi-thañ) のパルイエシェ (dPal-ye-shes) によるリンチェンザンポの伝記によれば、彼の建立した寺院はプランのカチャル (Kha-char)、グゲのトディン (mTho-ldiñ)、マルユル (Mar-yul: ラダック) のニャルマ (Ñar-ma) とされるが、Snellgrove D. & T. Skorupski [1980: 91] はこの伝記の註釈において、さらにザンカルのスムダ (gSum-mda') を加えている。

ラダックにおいては、ニャルマ (Ñar-ma) 寺院は現在廃墟となっているが、この他アルチ、スムダ、マンギャの寺院がリンチェンザンポの建立とされる [THUPSTAN PALDAN 1982: 39]。なお、Ñar-ma 寺院の建設時代はリンチェンザンポの在世期間 (958-1055 A.D.) から c. 1,000 A.D. と考えられ、また Alchi 寺院については Ñar-ma に学んだカルダンシェラブ (sKal-Idan-shes-rab) が建立したとする銘に基づき、11世紀後半 [SNELLGROVE & SKORUPSKI 1977: 15] と考えられる。

リンチェンザンポがラダック地方にもたらした仏教は松長有慶 [1980: 12-13] によれば、Tattvasaṃgraha-tantra, Durgatiparisódhara など7世紀頃インドで栄え、瑜伽観法を中心とし民衆教化を直接目的としない yoga-tantra 系のものであったとされる。また寺院の仏像、壁画に見られる特徴は、五仏の像、五仏を中心とするマンダラの中尊が智拳印、転法輪印、定印のいずれかを結ぶ Vairocana であることで、これは 1400 A.D. のラダック王国第2次王朝以後に建立された寺院が anuttara-yoga 系、即ち Guhyasamāja, Hevajra, Sambhara, Kālacakra などのマンダラを主とし、中尊は akṣobhya 系の諸尊であるという点と特色を異にする。この anuttara-yoga 系の寺院には六道輪廻図、地獄、極楽の絵、仏伝図など民衆教化に関する壁画が登場し、また現世利益信仰と密接に結びつく忿怒尊が出現する。

さらに、グゲの王イエシェウ (Ye-shes-'od) の甥または甥の子チャンチュブウ (Byang-chub-'od) によって、インドのナランダ (Nalanda) 大学から招かれたアテ

ィーシャ (Atisa) はこの西チベットにおこった仏教復興に大きな貢献をする [STEIN 1971: 65]。アティーシャは 1042 A.D. から 1054 A.D. に至るまでチベットに滞在し、特に女神ターラ (Tārā) の尊崇に重きを置き、カダム派 (bKah-gdams-pa: bKahbrgyud bKah-gdams-pa) を創始する [TUCCI & HEISSIG 1970: 37]。マルパ (Mar-pa 1012-1096 A.D.) もインドで学び弟子のミラレパ (Mi-la-ras-pa 1040-1123 A.D.) とともにカギユ派の始祖とされる。

カギユ派は後にディグン派 (hBri-guñ-pa), ドック派 (hBrug-pa), カルマ派 (Karma-pa), シャン派 (Shañs-pa) などに分派する。また、先のカダム派は後年、ツォンカバ (Tsoñ-kha-pa 1357-1419 A.D.) の改革により始まるゲールク派 (dGe-lugs-pa) に移行する [TUCCI & HEISSIG 1970: 51] ことになる。

ラダックには15世紀以後、中央チベットから改革派ゲールク派をはじめ、ディグン・カーギユ派、そしてブータンと関連の深いドック・カーギユ派が導入され、王朝の保護のもとに繁栄することになる。先に述べたインド北西部ガンダーラ、さらにカシミールからのインド仏教の影響を第1次伝播とし、11世紀に西チベットを中心に興ったリンチェンザンポ (Rin-chen-bzañ-po), アティーシャ (Atisa) による yoga-tantra 系の仏教の導入を第2次伝播とすると、この15世紀以後の中央チベットからの仏教の影響はラダックにおける仏教の第3次伝播と考えることが可能である。これらチベット仏教諸宗派とラダック王国との関係については、ラダック王国における宗教政策という観点から以下に考察を行なう。

(2) 宗教政策

ラダック王統史はラダック王朝諸王の業績と仏教の繁栄についての記載に飾られるが、その背景には仏教諸宗派間あるいはイスラムと仏教との間の宗教的抗争の歴史を読み取ることが可能である。この節では、ラダック西方隣接諸国におけるイスラム化と、ラダックへのイスラム勢力拡大の傾向について指摘し、次にこれに伴うラダック王国の宗教政策について考察する。

(i) イスラムの影響

イスラム化の問題はラダック第1次王朝後期に既に始まっていたと考えられる証拠がある。即ち、ラチェンギャルプリンチェン (Lha-chen Rgyal-bu-rin-chen c. 1320-1350 A.D.) はカシミールにおける初代のイスラム王となった可能性があると考えられるからである⁵⁾。これ以前のカシミール王国はヒンドゥー王朝であり、仏教からイスラムに改宗したギャルプリンチェンは王位を宣言すると同時にヒンドゥー寺院の破壊に

よる異教徒弾圧に着手する。当時のカシミールはタタール人により侵攻を受け占拠されており、さらに14世紀の終りにはティムール皇帝ティムール (Timūr) は中央アジアのサマルカンド (Samarkand) に都し、イスラム教徒によるキリスト教徒、仏教徒への迫害が行なわれていた。

15世紀初頭、ラチェントクブムデ (Lha-chen Grags-hbum-lde c. 1400-1440 A.D.) は、ラダック第1次王朝最後の王であるロトクダグ (Blo-gros-mchog-ldan c. 1440-1470 A.D.) を王位継承者とするが、彼以外にも2人の息子があったことが明らかである。これに関しては、ラダック王統史第7部におけるラチェンバガン (Lha-chen Bha-gan c. 1470-1500 A.D.) がトクブムデ王の息子達に敵対したとの記載に、その息子達の名前として上記のロトクダグ以外にルンパアリ (Druñ-pa 'A-li) およびラプツァンダギャルの2名を見ることが出来るからである。ここで、第2子のルンパアリという名前はその半分はイスラム名であり、Francke, A. H. [1926: 102] はこれをラダックを攻略したザインウルアビディーン (Zainu'l'ābidīn) によってトクブムデ王がイスラムの妻をめとられた結果であろうと推測している。カシミールのイスラム王であるザインウルアビディーンに関して Gergan, S. S. [1977: 20] は、バルティスタンの首長の忠誠の保証のもとに彼はグゲを攻略し、ラダックのシェー、ムルベに至ったと考えている。もっとも、彼はヒンドゥー教にも寛

5) Francke [1926: 98, 1977: 94-96] は、年代の符合性、名前的一致、さらにギャルブ (rGyal-bu: 王子) という名称に基づき、ラチェンギャルプリンチェン (Lha-chen Gyal-bu-rin-chen) とリンチャンシャ (Rainchan Shah: Riñchana Bhatta) の同一性を認めている。ジョナラジャ (Jonarāja) によるカシミール王統史 (Rājatarāngini) によると、14世紀初頭、シムハ・デヴァ (Simha Deva) 王の時代のカシミールはタルタル人の王ズルカダル・カーン (Zulkadar Khan) によって侵攻を受ける。ズルカダル・カーンはトルコ人の侵略者ドルルカ (Druluca) とも記され [Vogel, J. Ph. In: FRANCKE 1977: 169-171] るが、さらに Bamzai [1962: 310] のカシミールの歴史によると当時チャガタイの子孫たちによって治められていたトルキスタンのタルタル人の首長であるドルチュ (Dulchu) は、トルコ人、モンゴル人から成る6万の騎馬軍団をもってジェルム (Jhelum) 溪谷からカシミール溪谷に侵入したとある。このため、シムハ・デヴァ王はキシタワール (Kishtawar) に逃れ、ズルカダル・カーンはスリナガルを8カ月間に渡り占拠する。冬期に入り食料不足から彼の軍隊はカシミール脱出をはかるが、雪に閉じ込められて全滅する。そこで、シムハ・デヴァ王の指揮官ラム・チャンド (Ram Chand) はスワト (Swat) 出身のシャー・ミルザ (Shah Mirza) とリンチャン・シャー (Rainchan Shah) をもってカシミールを奪還する。ここでリンチャン・シャーについてはチベットの子王である父親と不和になりカシミール溪谷に冒険者として来たことになっている。もっとも、Bamzai [1962: 309] によるとリンチン (Rinchin 1320-1323 A.D.) は彼の父を殺害したバルティに対し報復攻撃を行ないバルティの首長達を殺した後、安全のためにカシミールに逃走し、ラマチャンドラ (Ramachandra) の保護のもとにあったと述べられる。この後、リンチャン・シャーはラム・チャンドを殺害し、彼の娘クタ・ラニ (Kuta Rani) と結婚し、1323 A.D. にカシミール王位を宣言する。彼はヒンドゥー教に改宗しようとするが、ブラーミンたちに拒否されたため、イスラムに改宗しサドルウディン (Sadr-ud-din) と名をのめる。彼は最初のイスラムのカシミール王である。2年半の後、彼は死亡し妻はシンハ・デヴァ王の弟と結婚する。さらにその後、彼女は前出のシャー・ミルザと結婚し、シャーミルザがカシミール王位につくことになる。

容であり破仏を行なわなかったといわれているため、ラダックにおける仏教への打撃は少なかったものと考えられる。むしろ、姻戚関係によるラダック王国との関係を通してイスラム化を計ろうとしたのではないかと考えられる。

同様な事例は、ラダック第2次王朝創始者のラチェンバガン (Lha-chen Bha-gan c. 1470–1500 A.D.) の二世代下のジャムヤンナムギャル (hJam-dbyaṅs-rnam-rgyal c. 1560–1590 A.D.) の治世において見られる。彼はバルティ王アリミールセルカーン (?A-li-Mir-Śer-Han:Khan) の娘のギャルカートゥン (rGyal-kha-thun) との婚姻によりバルティ軍との講和を計る⁶⁾。もっとも、この時期にはイスラム化の拡大は既にラダック王国西方諸国のみならず、かつてのラダック王国の一部であったプーリック (Pu-rig) にも及んでいた。プーリックのチクタン (Cig-tan) とカルツェ (dKar-rtse) の王子たちはイスラムに改宗し、自らをスルタン (Sultan: イスラム君主) と名のり、ラダック王国の意に従わなかったことがラダック王統史に記載されている。

隣接諸国からラダック王国に対する攻略は第2次王朝を通じて見る事ができる。ラチェンバガン (Lha-chen Bha-gan c. 1470–1500 A.D.) の時代にはシュリバラ (Śrīvara) のカシミール王統史によればカシミール王ハサン・カーン (Hasan-khān) がラダック侵攻を計ったことが述べられている [FRANCKE 1926: 102]。また彼の息子のドラシナムギャル (bKra-śis-rnam-rgyal c. 1500–1532 A.D.) はホル (Hor) と戦い勝利をおさめた。Francke, A. H. [1926: 104] はホルをラダック北方の Turkmans と考え、タリクイラシディ (Ta'rikh-i-Rashīdī) の記載にあるタシクン (Tashi-kun) はドラシナムギャルと同一人物であり、この戦いにより 1532 A.D. に死亡したものと考えている。さらに、Gergan, S. S. [1977: 25] は 1532 A.D. にミルザハイダルドゥグラート (Mirza Hyder Dughlat) がラダックに侵攻したと考えている。彼はヌブラの住民にイスラムを受容させようとしたが、貴族と首長はこれを拒否

6) スカルド (Skar-rdo) のアリミールセルカーン (?Ali-Mir-Śer-Han: Khan) の進攻によりラダック全域はバルティ軍に征圧される。彼等は仏典を焼却し、河に投棄し、寺院を破壊すると自国に引きあげたとする。この時、ラダック王ジャムヤンナムギャルはアリミールの捕虜となったものと考えられる。王統史には続けて次の記載が見えるからである。即ち、アリミールは喜んで彼の娘のギャルカートゥン (rGyal-kha-thun) をジャムヤンナムギャルの妻として与えた。アリミールはすべての兵士たちのために祝宴の準備を行ない、ギャルカートゥンを彼女のすべての宝石で飾り、ジャムヤンナムギャルを王座につかせると次の様という。昨日、私は城の下にある河から一頭の獅子が出現し、ギャルカートゥンに跳びかかるとその身中に消える夢をみた。それは彼女が懐胎するのと同時であった。彼女は男児を産むであろう。彼の名はセンゲナムギャル (Sen-ge-rnam-rgyal: 獅子王) と呼ばれるであろうと。こうして、ラダック王はアリミールの娘ギャルカートゥンと共に帰国を許される。その後、ギャルカートゥンはセンゲナムギャルとノルブナムギャル (Nor-bu-rnam-rgyal) の二人の息子をもうける。

したため、彼等を殺害し、あるいは捕虜とした。その後、軍隊はレーに入りその2人の支配者はイスラムを受け入れたという。Stein [1971: 78]によると、将軍ミルザ・ハイダルはトルキスタン地方、カシュガルのサルタンであるサイド汗とともに1531-1533 A.D. に中央チベットまで進出している。ラダック王統史によれば、その後、ツェワンナムギャル (Lha-chen Tshe-dban-rnam-rgyal c. 1532-1560 A.D.) はホルを逆に攻撃しようとしたが、ヌブラ住民の請願により思いとどまった。当時、ヌブラ住民がラダックとヤルカンドとの間の交易活動に従事し、したがって両国の友好関係の維持を重視したからであろうということについては既に交易経済の章で述べた通りである。さらに、センゲナムギャル (Sen-ge-rnam-rgyal 1569-1594 A.D.) の時代になると、バルティ王アダム・カーン ('Adam-mkhan) に率いられる軍隊がラダック攻略を計るが、カルブ (mKhar-bu) の戦闘において撃退させられている⁷⁾。ラダック王統史にはここでも多くのホル (Hor) が殺されたとあり、彼等はムガル (Mughal) の兵士 [FRANCKE 1926: 110] であるとも考えられるが、いずれにしてもイスラム教徒と仏教徒との間の戦争であったということできる。

以上、述べたようにラダック王国第1次王朝後期から、第2次王朝センゲナムギャルに至る時期、イスラム化したラダック西方隣接諸国からのラダック王国に対する攻略が続く。それは、直接軍事行動と戦闘行動のみならず、ラダック国王とイスラム王妃の婚姻という両国の姻戚関係の樹立という方法を伴うものであるということができる。

(ii) 宗教維持機構

この節では、西方隣接諸国からのイスラム勢力の拡大に対処するためのラダック王国の政治-宗教政策について宗教維持機構という視点から考察する。さらに、モンゴル戦争 (c. 1679-1685 A.D.) におけるチベットからの改革派ゲルク派のラダック国教化の試み、およびムガル帝国下カシミールからのイスラム化の試みを、仏教-イスラム宗教抗争の延長線上に位置づけ、これに対するラダック王国の政治-宗教戦略について分析する。

ラダック王国の対イスラム戦略の第1は理念的な方法である。即ち、現実に対し仏教的解釈あるいは修正を加え、その教義に沿うような形で実質上のイスラム勢力の拡

7) カルブにセンゲナムギャルによる碑文があり、刻まれている年代 (水-犬年: 1634 A.D.) からおそらくこの戦闘の戦勝碑であると考えられる [FRANCKE 1926: 112]。しかし、Gergan [1977: 25-26] によれば、センゲナムギャルの在位年代は 1569-1594 A.D. であり、その息子のデルダンナムギャルの在位年代が 1594-1659/60 A.D. とされている。これにしたがえば、カルブの戦闘はデルダンナムギャルの治世ということになる。

大を緩衝し、さらに仏教的立場から容認することのできない事実は無視するという方法である。たとえば、ラダック王統史におけるラチェンギャルプリンチェン (Lha-chen rGyal-bu-rin-chen c. 1320–1350 A.D.) の項には、彼の名前以外の記載は見あたらない。即ち、彼がラムチャンド (Ram Chand) を殺害し、リンチャンシャ (Rainchan Shah: Riñchana Bhotta) として、カシミール王となり、イスラム改宗を行なったかも知れないということは述べられていないのである。また、前述したようにラチェントラクブムデ (Lha-chen Grags hbum-lde c. 1400–1440 A.D.) の息子の一人がアリ ('A-li) というイスラム名を持つが、これに至った経過についても王統史は無視する。さらに、ジャムヤンナムギャル (hJam-dbyaṅs-rnam-rgyal c. 1560–1590 A.D.) の項では、彼がイスラムであるバルティ王アリミール ('A-li-Mir-Śer-Han) の娘ギャルカートゥン (rGyal-kha-thun) と結婚したということについては記載されているが、この王妃はトホルマ (sGrol-ma) の化身、即ち仏教の女神ターラ (Tārā) の転生であると註釈を加えることにより仏教徒としてのラダック王朝の存続を正当化しているのである。

ラダック王国における対イスラム戦略の第2は現実的方法である。王統史に見るラダック王国諸王の業績についての記載には、仏教に対する信奉と振興活動が含まれている。これらは仏教の教義そのものの振興と同時に、異教徒に対する戦力強化という側面を持つものでもある。仏教振興とは王朝による仏教保護と、教会による民衆教化という政治的機能を持ち、戦力強化は要塞としての寺院の建設という軍事的機能を持つものである。寺院の多くが急峻な断崖の上に建てられ、巨大な穀物貯蔵庫を持つということは、防御重視の持久戦にとって有利であると考えられる。当時の攻撃戦略は長距離遠征と略奪であり、事実、西チベットにおいて長期戦を行なうことは侵略軍にとって自然条件の厳しさと補給路の確保という点から困難であったと考えられる。侵略軍は攻撃が終わると再び自国へ撤退せざるを得ないのであり、このような攻撃方法に対する対抗戦略としては、持久戦による防衛戦略が効果的であったと考えられる。

ラダック王国第2次王朝ラチェンデレクナムギャル (Lha-chen bDe-legs-rnam-rgyal c. 1660–1685 A.D.) の時代におけるモンゴル戦争 (c. 1679–1685 A.D.) は、チベット-モンゴル軍とラダック軍、さらにチベット-モンゴル軍とカシミール軍との間の戦闘ではあったが、実際にはモンゴル帝国下チベット⁸⁾とムガール帝国下カシ

8) 当時のモンゴルとチベットとの関係は以下のようなであった [岡田 1981: 215–216]。即ち、ウェンサ・トゥルクという高僧の転生であるとされたガルダンはチベットのラサに留学し、ダライ・ラマ5世の弟子になっていたが、1678 A.D. イリ河畔にホシュート軍を撃破し、全オイラトの指導者となりジューン・ガル王国を建てる。彼は 1680 A.D. 東トルキスタンのオアシ

ミールによるラダック王国の覇権争奪戦として考えることも可能であり、宗教的には仏教とイスラムの間の宗教抗争の延長線上に位置づけられるものである。結果的には、ラダック王国はその東部ガリコルスム (mNah-ris-skor-gsum) 地方を失い、チベット、カシミール、双方から交易経済活動に関する制約を受ける。しかし、宗教的には、カシミールによるイスラム化およびチベットのダライ・ラマ政権による仏教ゲールク派の国教化は共に成功していない。なぜなら、ラダック王統史はラチェンデレクナムギャルのイスラム改宗について無視し、また軍事行動によるラダック攻略に失敗したチベットはラダック王朝の宗派であったドック・カーギュ派の僧ミパムワンポ (Mi-pham-dbañ-po) の仲裁をもって講和を計り、新たな国境線の確定を行なうにとどまるからである。この結果、チベットはラダックを仏教国と非仏教国との境界地域として位置づけ、そのイスラム化を阻止するという政策をとるとどまることになる。

モンゴル戦争の結果、ラダック王国の覇権は著しく縮小する。しかし、他方でラダック王国は強大なチベット-モンゴル軍にカシミール軍をもって対処せしめることにより、両者に経済的負担は負わされたものの、ゲールク派ダライ・ラマ政権による統治を阻止し、さらにカシミールによるラダック王国のイスラム化をも排除し、独立国としての存続を計ったと考えることが可能である。その背景には、チベットによるゲールク派国教化を怖れたラダック王朝とドック・カーギュ派の連帯関係に基づく政策決定がなされたものと考えられる。チベットにおいては既に王朝は亡び、ダライ・ラマ政権による統治形態がとられており、これを受け入れるということはラダック王国

ス都市のウイグル人イスラム教徒の白山党 (アクタグリク)、黒山党 (カラタグリク) の争いに介入して黒山党を支持する東チャガタイ・ハーンの末裔のカシュガルのイスマイル・ハーンを捕えてイリに連れ去り、白山党の首領アバク・ホージャをヤルカンドにおいて貢税の徴収にあたらせた。また、このころ中国では三藩の乱 (1673-81 A.D.) が進行中だったが、清朝が優勢となり、このためチベットの前途を憂えたダライ・ラマはガルダンを利用してモンゴルとオイラトを結集し、ゲールク派仏教帝国を建設しようと計画した。もっとも、1683 A.D. にダライ・ラマ 5 世は死去するが、摂政サンギェギャツォは 5 世の死を秘密にし、計画の挫折を防いだ。Francke [1977: 119] は、この侵攻にはモンゴルの覇権拡大の意図があったと考えている。当時、チベットはモンゴルの支配下にあり、モンゴルは西チベットへの侵略を目的としていたという。しかし、Gergan [1977: 26-28] はモンゴル戦争の主導性はむしろチベットのラサ政府の側にあったと考えている。即ち、チベットの第 5 世ダライ・ラマ (1617-1682 A.D.) はその宗教的権威によってモンゴル、中国のみならず、ブータン、シッキム、ネパール、ラダックに対し、政治的権力と改革派であるゲールク派の影響の拡大をはかろうとした。当時、ラダックにおける寺院の多くは古派に属し、ジャムヤンナムギャル以来の守護僧はタックツァン (sTag-thsang) であり、守護聖人はパドマサムバヴァ (Guru Padma sambhava) であった。センゲナムギャルと息子のデルダンナムギャルの時代には、ラダック王朝と教会はラサ政府に耳をかさず、センゲナムギャルはガリコルスム地方からモンゴル軍を撃退させ、ゲールク派の寺院に対しても容赦を加えなかった。そこで、センゲナムギャルの死去にともないラサ政府はモンゴルを扇動し、モンゴル僧ガルダンツェワンの指揮のもとにチベット-モンゴル軍をもってラダック攻略を行なった。その目的はラダックにおけるゲールク派の国教化とガリコルスム地方の獲得にあったと考えられる。

の独立を危うくすることを意味するからである。また、ゲールク派国教化は、ラダック王朝と結びついていたカーギュ派の勢力を後退させることになる。したがって、カシミール軍の導入はラダック王国の独立とカーギュ派の存続をかけた政治的判断であったと理解される。もっとも、この背景には従来のイスラム諸国との間の姻戚関係に見られるように、イスラムの方が寛容であるという認識があったと考えることもできよう。

従来、モンゴル戦争におけるラダック王国の対応策に関しては、ラダック王が彼自身で戦争に行くことがなかったという事実、および窮境の故のカシミール太守への救済が失策として批評される [FRANCKE 1977: 120] が、以上の点をふまえればこれらの解釈は必ずしもあてはまらない。むしろ、窮境にありながらも王国の独立と宗派の存続をかけたラダック王国としての積極的な政治-宗教維持機構が機能していたと指摘することが可能である。

(3) 教会と王朝の関係

この節ではラダックにおける仏教の歴史的背景と王統史に基づくラダック諸王と各仏教宗派との関係を記載し、教会と王朝との関係について考察する。

既に述べたように、リンチェンザンポ (Rin-chen-bzañ-po)、アティージャ (Atisa) などインド仏教の影響の強いカダム派 (bKa'-gdams-pa) 以後、最初にラダックに入ったチベット仏教はゲールク派であった。ラダック王統史によれば、トクブムデ (Grags-hbum-lde c. 1400-1440 A.D.) の時、ツォンカパの礼法が導入される。即ち、ラダックを訪れたゲールク派の使節に賛同したラダック王によりペトゥ (dPe-thub) 寺院の出現を見たとある。もっとも、これ以前にラダックが他のチベット仏教宗派と接触を持たなかったというわけではない。たとえば、カーギュ派 (bKah-brgyud-pa) の支派であるディグン派 (hBri-guñ-pa) はジクテンゴンポ (hJig-rten-mgon-po: hBri-guñ Dharmasvamin 1143-1217 A.D.) によって創設されるが、カイラサ (Kailāsa) 周辺における 1215 A.D. のギャガンパ (Ghu-ya-sgañ-pa) による布教活動に関し、グゲ (Gu-ge)、プラン (Pu-rañ) の諸王と共にラダック (Mañ-yul) 王ラチェンゴトルップゴン (Lha-chen dÑos-grub-mgon c. 1290-1320 A. D.) が保護と援助を行ったとされる。王統史の記載にはラダック王が学僧を中央チベットのウツェン (dBus-gtsañ) に留学させることが始められたとあるが、Petech, L. [1978: 316] はこれもディグン・カーギュ派の影響であろうと推測している。もっとも、ラダック王国における正式なディグン派の確立はこれより後であり、ドラシナムギャル

(bKra-sis-rnam-rgyal c. 1555–1575 A.D., PETECH; cf. c. 1500–1532 A.D., FRANCKE) によるチョスジェダンマクンガトラクパ (Cós-rje lDan-ma Kun-dgah-grags-pa) の招聘に始まるものである。その後、センゲナムギャル (Señ-ge-rnam-rgyal c. 1590–1635 A.D.) の治世、ドック・カーギュ派 (hBrug-pa bKah-brgyud-pa) の僧タックツァンラチェン (sTag-tshaii-ras-chen) がラダックに招聘され、ヘミ寺院を拠点に王朝の保護を受けて繁栄する。さらに、ラダック王国末期のツェワンナムギャルⅡ世 (Tshe-dbañ-rnam-rgyal 1752–1782 A.D.) およびラチェンツェタンナムギャル (Lha-chen-[mi-hgyur] Tshe-brtan-rnam-rgyal 1782–1808 A.D.) はディグン・カーギュ派の僧、第6代ルトクダン・リンポチェ (rTogs-ldan Rin-po-che) の教えを受けている [PETECH 1978: 325]。しかし、ツェタンナムギャルには息子がなく、ヘミ寺院の僧侶となっていたツェパルミギェルドントルップナムギャル (Tshe-dpal-mi-hgyur Don-grub-rnam-rgyal 1808–1830 A.D.) が王位につき、その息子でラダック王国最後の王であるツェワンラプタンナムギャル (Tshe-dbañ-rab-brtan-rnam-rgyal 1830–1835 A.D.) は、ドック・カーギュ派と結びつくことになる。

以上、述べたように、チベット仏教各宗派はその出発点においては王朝の保護の下にラダックに招聘され、布教の拠点を築いてきたといえる。ここでは、ラダック王国諸王は仏典カーギュル (bKah-hgyur)、タンギュル (bsTan-hgyur) の写本に努め、寺院に膨大な宝物、物資を奉納し、さらに領地をも寄進したことが、ラダック王統史に詳細な目録とともに記されるのである。

ラダック王国末期には、寺院はその維持のため国王より譲渡された4,000戸からの収入源 [CUNNINGHAM 1854: 269] を既に確保するに至っている。また、ラダック王統史に記されるドラシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal c. 1500–1532 A.D.) によって制定された、各村から僧侶になるべき者の数に関する規則により、寺院は安定した人材の供給を確保したと考えられる。したがって、ラダック王朝によるチベット仏教各宗派に対する擁護策は、宗教的繁栄のみならず寺院の経済的発展の基盤となつたと理解することができる。教会がラダック王国の政策決定に明確な主導性を現わすようになるのはモンゴル戦争 (c. 1679–1685 A.D.) の時である。モンゴル戦争における国家政策の決定にラダック王朝とドック・カーギュ派による政治-宗教維持機構が働いていたと考え得ることについては、前節において既に分析、考察した通りである。しかし、教会と王朝との政治-宗教的關係はモンゴル戦争の時に始まったものではない。既にセンゲナムギャル (Señ-ge-rnam-rgyal c. 1590–1635 A.D.; 1569–1594 A.D.) の治世において、センゲ (獅子) 王とタック (虎) 僧が、人々によって太陽と

月とにたとえられ、ラダック王国の繁栄が賛美された時に、それは確立していたものと考えることができる。それ以前においても、ドラシナムギャル (bKra-sis-rnam-rgyal 1500-1532 A.D.) が、殺害した敵のホル (Hor) の死体を王宮のあるナムギャルツェモ (rNam-rgyal-rtse-mo) 丘に建てた堂の仏像の足下に置いたというラダック王統史の記載があることから、既に戦争という国家事業における宗教あるいは教会の役割を指摘することができるのである。

しかし、モンゴル戦争以後、教会はラダック王国の内政、外交への直接の関与を行なうことが、王統史より読み取ることができる。特に、王位継承問題の表面化するデスキョンナムギャル (bDe-skyoñ-rnam-rgyal 1720-1739 A.D.) およびプンツォクナムギャル (Phun-tshogs-rnam-rgyal 1739-1752 A.D.) 以後になると、教会は抗争の調停あるいは国王の処遇に関し明確な政治権力を行使し、寺院、僧侶の個別具体的な名前がラダック王統史に登場する。たとえば、ツェワンナムギャルⅡ世 (Tshe-dbañ-rnam-rgyal 1752-1782 A.D.) はヘミ (He-mi) 寺院に軟禁させられ、また彼の次男で王位継承権を持たないツェパルミギェルドントルップナムギャル (Tshe-dpal-mi-hgyur Don-grub-rnam-rgyal) もヘミ寺院の僧侶とされる。

さらに、ラダック王統史第8部には興味ある記載が見られる。即ち、後にラダック王国最後の王となるツェワンラプタンナムギャル (Tshe-dbañ-rab-brtan-rnam-rgyal 1830-1835 A.D.) は、木・牛年 (1817 A.D.)、僧ヤンズィンガバ (Yañ-hdzin-lña-pa) によりヘミ寺院のビルパドルジェ (Bhil-ba-rdo-rje) の転生であると理解せられ、その居所もヘミ寺院と末寺のテチョク (Theg-mchog) 寺院とされるのである。これらはいずれもドック・カーギェ派に属する寺院であり、この決定を教会による王朝との融合政策の試みと考えることが可能である。

事実、同様な試みはラダック王国がドグラ戦争 (1834 A.D.) によりその独立を失った後、ディグン・カーギェ派により現実化される。即ち、ツェワンラプタンナムギャルの王子であるジクメドクンガナムギャル (hJigs-med-kun-dga'-rnam-rgyal) は中央チベット生まれでガンゴン (sGañ-sñon: Phyi-dbañ チワン) 寺院に派遣されたディグン・カーギェ派の第7代転生ガワンデレクワンチュク (Ñag-dbañ-dge-legs-dbañ-phyug) を師とするが、さらにその息子はヤンリガル (Yañ-ri-sgar) に学び学者となってラダックに帰還すると、第8代転生ルトクダン・リンポチェ・ナワンロトギャルツェン (rTogs-ldan Rin-po-che Ñag-dbañ-blo-gros-rgyal-mtshan) となり、ラマユル寺院、ガンゴン寺院の修復を行なう [PETECH 1978: 325] に至るからである。

以上、述べたようにチベット仏教各宗派は、経済的基盤の充実に伴い内政外交に係る国家政策の決定に関与し、政治-宗教機構を確立する。そして、最終的には仏教各宗派は弱体化したラダック王朝との融合政策による新しい形の統合機構の形成へと向かったと考えることができる。しかし、結果的には、シーク王国ドグラ軍のラダック王国征服により、教会と王朝との融合化とその維持は独立国家としてのラダック王国の統合機構として実現されるには至らなかったと理解することができるのである。

5. 結 論

以上、西チベットにおけるラダック王国史の人類学的考察を歴史-生態学的視点から行なった。その結果、経済機構、政治機構、宗教機構に関して次の事が明らかとなった。

経済機構については、ラダック王国の成立から発展に至る経済的基盤として、交易活動という交易経済が重要な役割をはたしていることが指摘される。この交易経済の特徴はラダック、チャンタンなど西チベット高地産の山羊毛であるパシュムのカシミアールへの原料輸出、および中央アジアとインドとの間の南北交易における中継交易活動にある。前者では、ラダック王国は交易経済における原料生産者としての地位を占め、後者では交易活動の仲介的役割を持つ。隣接諸国間との和平条約、交易協定の締結は、交易路の確保、交易活動の制御が国家政策として行なわれていることの証拠であり、ラダック王国における経済-政治機構の存在を示すものである。

ラダック王国の政治機構は王朝、官僚、教会により構成され、租税および関税は国家歳入として王と宰相の利益となる。さらに、交易商品の関税免税の特権が王と官僚にあり、彼等による交易商業活動に利益を与える。したがって、王と宰相とは国家歳入の最高位における再配分者としての地位を占めるということが出来る。国家歳入は王宮における財産、宝物として蓄積され、また寄進として寺院に配分、蓄積される。

王朝は系譜的に継承される。特にワムレ (Wam-le) の調停以後、王位は長男が継承し、弟は僧侶になること、ザンカル (Zaŋs-dkar) 王国、ヘナスク (He-nas-sku) 王国の存続は認めるが、ラダック王国においては一つの王国に2人の王は認めない、という王位継承の方法に関する原則が確立される。宰相はカロン (bkah-blon) と呼ばれる貴族の家系から選出される。したがって、彼等と他の農牧民との間に明確な階層制を認めることができ、王国は専制国家的形態をとる。しかし、政治権力に関しては王権が必ずしも絶対ではなく、宰相および教会による王権に対する牽制を指摘する

ことができる。特に、ラダック王国衰退期には王朝と宰相との間の拮抗関係、宰相による王朝との融合政策が明確化する。さらに、この背後には宰相を選出する地方貴族領主間の対抗関係を指摘することができる。

宗教機構について、仏教維持機構としての対イスラム政策を指摘することができる。これはラダック王国と西方隣接諸国との間の文化的、宗教的境界の形成と維持という機能的役割を持つ。さらに、チベット仏教内部の宗派であるドク・カーギュ派による対ゲールク派、即ちチベット政策を指摘することができる。これら宗教維持機構は、一方で仏教-イスラム間、および仏教諸宗派内の対抗関係を政治的に顕在化し、他方で教会による王権の牽制、王朝との融合政策という宗教-政治機構の形成を可能としている。結果として、教会は内政的には民衆教化という社会的機能を持ち、外交的には隣接諸国間との戦争、和平という国家政策に関する政治的機能を持つ。

したがって、序論において設定した第1の問題である生態、経済、政治、宗教相互間の関係とは、ラダック王国の統治機構、あるいは統合機構であるということが出来る。この統合機構とは、経済的には交易経済を基盤とし、宗教的には仏教国としての文化的アイデンティティを持ち、政治的には王権国家としてのラダック王国の独立と存続を中軸とする。しかし、その内部は王朝と宰相、王朝と教会それぞれの間における拮抗関係、さらにその背後における地方貴族領主間、仏教諸宗派間の対抗関係により作動していると考えることが可能である。

次にこの機能的関係が、ラダック王国の歴史的過程と如何に関連しているのかという第2の問題に関しては以下の様に考えることができる。即ち、ラダック王国の成立、発展、衰退という歴史的（時間的）過程は、ラダック王国の統合機構の動態的变化そのものである。ラダック王国の成立とは、王朝による独立領主であった地方諸領主の支配と交易路、交易活動の確保であり、交易経済基盤の確立であった。さらに、ラダック王国の発展とは、王朝の覇権拡大政策に支えられた交易経済の充実と制御の確立過程である。この経済機構は王朝、官僚、教会から成る政治機構を確立させ、この政治機構はさらに経済基盤の維持機構として機能する。宗教は王権を支持し、正当化するために機能し、官僚は王権のもとでの行政機関として機能する。もっとも、この政治機構はラダック王国の発展により新たに出現したものではない。王、官僚、宗教専門家の存在は既に吐蕃王国において、ツェンポ（君主）が右手にシャーマン長を従え、左手に大臣を従える三頭鼎坐の形で運営されていた可能性がある [佐藤 1959: 716] ことに示されるように、ラダック王国成立時以前からその模範があったからである。しかし、これがラダック王国の統合機構として機能するに至るには、経済基盤

の充実とこれに伴う政治機構の変化と調整が必要であったと考えることができる。特に、1400 A.D. のラダック王国発展期に相当する第2次王朝以後に建立された anuttara-yoga 系寺院が、民衆教化、現世利益信仰という特徴を持ち、それ以前の瑜伽観法を中心とし民衆教化を目的としない yoga-tantra 系密教とは異質であることは、ラダック王国の統合機構における宗教の新たな役割を示唆するものである。さらに政治機構そのものにおいてもセンゲナムギャル (Sen-ge-rnam-rgyal) に見られる様に国王と宰相とを兼任するという強力な統治権の形成を指摘することができるのである。

ラダック王国の衰退とは、交易経済の充実が政治機構の維持のために機能するのではなく、むしろ権力の分散化を引き起こした結果によるものである。即ち、交易経済による利益の再配分は教会および地方貴族領主である宰相の経済力増大を可能とし、王朝、宰相、教会の経済的、政治的権力の分化を出現させたと考えることができる。王権は相対的に弱体化し、王朝の形骸化と、宰相および教会による王朝の融合政策がとられる。王朝との融合政策における宰相、教会それぞれの方法は異なっている。即ち、宰相は自分の娘を王妃とすることによる外戚関係の強化を通して王権との融合を計ろうとした。これに対して、教会は王子をチベット仏教宗派の高僧の転生であると認定することにより王権との融合を実現しようとした。

ラダック王国の独立を失わせるのは最終的にはシーク王国ドグラ軍による侵略であり、またラダック王国の衰退は王統史には王位継承権をめぐる王朝の内部抗争と王個人の資質に起因するものであると記載される。しかし、ラダック王国の衰退とは、人類学的視点からの考察に基づけば、ラダック王国の統合機構の変化に他ならない。この機構変化の特徴は王朝と宰相、王朝と教会という政治的、経済的拮抗関係を対立関係として顕在化することなく、宰相および教会がそれぞれ王朝との融合政策を試み、王権を形骸化したことである。

第3の問題であるラダック王国の歴史的過程における生態学的意味については以下の様に考えることができる。即ち、生態的要因は経済的基盤となるのみでなく、経済、政治、宗教機構との間のフィード・バック機構を通して王国統合機構における動的構成要素として位置づけることができる。このことは、特にラダック王国の成立から発展過程において明確である。即ち、ラダック王国の生態的、地理的条件が交易経済を可能とするものであることについては既に記載したとおりであるが、この条件のみによって王国成立の十分条件とすることはできない。ラダック王国成立以前あるいは以後においても、中央アジアとインドとを結ぶ南北交易幹線路はラダック王国経由のもの

のではなく、インダス河中流のガンダーラ (Gandhāra) からギルギット (Gilgit) を経てカラコルム山脈西端あるいはパミール高原を越えるものであったと考えることができ⁹⁾、ラダック王国経由のカシミール (Kashmir) から大ヒマラヤ山脈ゾジ峠、およびカラコルム山脈東端のカラコルム峠を越えヤルカンド (Yarkand) に至る交易路の利用は、ラダック王国の積極的な開発の結果であると解釈することができるからである。したがって、政治的統制をもってはじめて交易活動がラダック王国の交易経済としての位置を確立したと考えられる。さらに、この経済基盤の充実が政治機構に変化をもたらす要因となるという正のフィード・バック機構を指摘することができる。この政治機構は交易協定を通してラダック王国と隣接諸国との間に政治的境界を形成する。さらに王朝と教会とによる政治-宗教機構により、宗教が政治的境界の維持機構としての機能を持つに至ると考えることができるのである。

交易商業活動が他のヒマラヤ地域においても、経済的、文化的に重要であることに関しては従来より指摘されているところである [川喜田 1966: 291-297; FÜRER-HAIMENDORF 1978: 339-357; 飯島 1982: 65-109]。しかし、本稿で論じたように、ラダック王国における交易の特徴は、政治的-宗教的機構を通して、それが、王国の形成にまで統合されているという点にある。このような王国統合機構とその変化はラダック王国の新たな生態的地位 (ecological niche) の確立として理解されるべきである。生態的地位とは、既に序論で述べたように単なる外的環境条件ではなく、人間活動を通して形成され境界維持機能を持つラダック王国の全体的位置づけそのものであると考えることができる。したがって、生態的地位とはラダック王国の統合機構と一体のものとして考察される必要がある。ラダック王国の成立、発展、衰退という歴史的過程は、国家あるいは文明の起源と文化進化 [FRIED 1967; SERVICE 1975; 梅棹 1981] という一般的問題の中に位置づけることができるが、ここでも生態的地位という概念を用いた歴史-生態学的視点が必要である。無論、ラダック王国は原初

9) 吐蕃の勢力拡大の時期、唐と吐蕃とはパミール高原の交通の要衝に位置する勃律、護密方面で争覇したことが次の様に述べられる [嶋崎 1977: 509-510]。即ち、開元の頃、大勃律 (バルティスタン) は吐蕃の支配するところであったが、大勃律が吐蕃に攻められた時その王が逃れて小勃律 (ギルギット) をたてたいきさつがあり、唐に親しみ唐に入朝している。護密はワッハンにあたり、ここもしばしば吐蕃に苦しめられた。開元10年 (722 A.D.)、小勃律は吐蕃に囲まれ唐に救援を求めたので、疏勒 (カシュガル) から出兵してこれを救った。しかし、開元22年 (734 A.D.) から25年にかけて吐蕃はしばしば小勃律を撃ち、ついにこの国に吐蕃の勢力がおよび、王も代り、吐蕃から王妃をむかえ吐蕃の配下に入った。また唐に通じていた護密も734年頃から10年くらいの間に吐蕃の支配を受けることになった。唐は天寶6載 (747 A.D.) ついに高仙芝に命じてパミール遠征を行なわしめた。仙芝は小勃律王を降し、護密なども唐に服せしめた。ついで仙芝は天寶9載 (750 A.D.) 吐蕃と結んでいた羯師 (チトラル) を討つためパミールを越え、その王をとりこにした。

的国家であるというよりは既にあった模範に従った二次的国家と考えるのが妥当であり、おそらくは征服王朝に起源するものか¹⁰⁾、あるいは現実には小独立王国の統一によりながらも系譜的には吐蕃王朝に起源をもとめるという正当化を行なったものかのいずれかであろう。しかし、その形成過程において、生態的要因と交易活動を機軸にしてフィード・バック機構をそなえた経済-政治-宗教機構という王国統治機構あるいは統合機構を出現させたということは、既に論じたところで明確にされてきたものと考えることができる。

このラダック王国という国家の生態的地位の特徴は、内部完結性という閉鎖性ではなく、政治的境界および宗教的境界を越えて文化、経済交流を可能にするという透過性という点にある。経済、文化交流の担い手はカシミール商人であり、さらにヤルカンド商人とラダック女性との混血であるアルゴン ('A[r]-rgon) と呼ばれる交易専門集団である。彼等は交易経済に伴う交易活動者として、ラダック王国の地理的-政治的境界の侵害を行なう。しかし、彼等イスラムと仏教徒ラダック住民の間には宗教的境界が存在し、両者のアイデンティティを分離する。この宗教的アイデンティティがラダック王国の交易経済を基盤とした南北の文化-経済交流という透過性を可能とし、かつラダック王国の統合機構として機能していると理解することができるのである。

文 献

BAMZAI, P. N. K.

1962 *A History of Kashmir*. Metropolitan Book.

1980 *Kashmir and Central Asia*. Light & Life Pub.

- 10) 当時のラダック地方について王統史は次の様に述べる。即ち、マルユル (Mar-yul) の上手ラダック (La-dvags-stod) はゲサル (Ge-sar) の子孫たちにより治められており、下手ラダック (sMad-rnams) は小独立公国に分割されていると。ここに登場するゲサル (Gesar) と云う名称について、Francke [1926: 94] は仏教以前におけるケサル伝説の王 (Kesar) の名を語る王朝がラダックに存在し、それはラダックの原住民であったダルド族 (Dard) と関係があったのではないかと考えている。しかし、一方でラダック王朝成立以前にダルド族ではなくチベット族の影響がラダック地方に存在していたということも無視できない。たとえば、吐蕃王国成立以前にラダックがチベット族と何らかの関係があったという可能性は否定できない。即ち、山口 [1983: 264-266] は吐蕃前史時代の考証的研究において、シャンシュン (Zhang-zhung) のラダック地区東部を大羊同に比定し、下手、上手の両シャンシュンの地にニャーティ・ツェンポ以前のピャ部族、もしくはトン部族、ム部族等の所在と、更に後に彼等と通婚したダン氏の女国を位置づけ、この上で、L. Petech により述べられるシャンシュン地域とヤルルン王家を中心とするチベット部族が7世紀以後にはじめて接触をもったとする考えに否定的見解を示している。また、吐蕃王国成立以後も、その勢力はラダックはもとより西方の大勃律 (バルティスタン)、小勃律 (ギルギット)、瑁師 (チトラル) にまで及んだということに関しては既に述べた通りである。これらのことから、ラダック王朝成立以前からこの地域が様々な形で既にチベットと関係があったということを指摘することができるのである。

- BARTH, F.
 1956 Ecological Relationships of Ethnic Groups in Swat, North Pakistan. *American Anthropologist* 58: 1079-1089.
 1969 *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Cultural Differences*. Universitetsforlaget, George Allen & Unwin.
- CUNNINGHAM, Sir A.
 1854 *Ladak, Physical, Statistical and Historical, with Notices of the Surrounding Countries*. London: Wm. H. Allen and Co.
- DESIDERI, I.
 1937 *An Account of Tibet*. George Routledge & Sons.
- ELTON, C. S.
 1927 *Animal Ecology*. Sidwick and Jackson.
- FRANCKE, A. H.
 1977(1907) A History of Western Tibet. In A. H. Francke (ed.), *A History of Ladakh*, Sterling Publishers, pp. 47-182.
 1972(1926) *Antiquities of Indian Tibet*. Part (Vol.) II. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, Vol. L., S. Chand & Co.
- FRIED, M. H.
 1967 *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*. Random House.
- FÜRER-HAIMENDORF, von. C.
 1978 Trans-Himalayan Traders in Transition. In J. F. Fisher (ed.), *Himalayan Anthropology*, Mouton Pub., pp. 339-357.
- GERGAN, S. S. and F. M. HASSNAIN
 1977 Critical Introduction. In A. H. Francke (ed.), *A History of Ladakh*, Sterling Publishers, pp. 1-46.
- GOVERNMENT OF INDIA
 1890 *Gazetteer of Kashmir and Ladakh*. The Superintendent of Government Printing. (rep. 1974)
- HARDESTY, D. L.
 1977 *Ecological Anthropology*. John Wiley & Sons.
- HEDIN, S.
 1909 *Trans-Himalaya: Discoveries and Adventures in Tibet*, Vol. I. London: Macmillan and Co.
- 飯島 茂
 1982 『ヒマラヤの彼方から—ネパールの商業民族タカリー—生活誌』日本放送出版協会。
- 煎本 孝
 1981 「西チベット, ザンスカール地区における人口と性比の村落間変異」『民族学研究』46(3): 344-348。
 1986 「ラダック王国史覚書」共著『ヒマラヤ仏教王国』三省堂, pp. 214-222。
- 川喜田二郎
 1966 「チベット文化の生態学的位置づけ——ユーラシアの文化生態学序説——」川喜田二郎, 梅棹忠夫, 上山春平編『人間—人類学的研究—』中央公論社, pp. 289-342。
- MACDONALD, A. W.
 1984 Religion in Tibet at the Time of Srong-btsan sgam-po: Myth as History. In L. Ligeti (ed.), *Bibliotheca Orientalis Hungarica* Vol. XXIX/2: *Tibetan and Buddhist Studies Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Körös*, Vol. 2, Akadémiai Kiadó, pp. 129-140.
- 松長有慶
 1980 「ラダック地方におけるリンチェンサンポの遺跡」『第3回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書』高野山大学チベット仏教文化研究会, pp. 11-16。

岡田英弘

1981a 「モンゴルの統一」護 雅夫・神田信夫編『北アジア史（新版）—世界各国史12』山川出版社, pp. 135-182。

1981b 「モンゴルの分裂」護 雅夫・神田信夫編『北アジア史（新版）—世界各国史12』山川出版社, pp. 183-228。

PETECH, L.

1977 *The Kingdom of Ladakh: C. 950-1842 A.D.* *Serie Orientale Roma* Vol. LI, Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, pp. 1-191.

1978 *The 'Bri-guñ-pa Sect in Western Tibet and Ladakh.* In L. Ligeti (ed.), *Bibliotheca Orientalis Hungarica* Vol. XXIII: *Proceedings of the Csoma de Körös Memorial Symposium*, Akadémiai Kiadó, pp. 313-325.

RIZVI, J.

1983 *Ladakh: Crossroad of High Asia.* Oxford Univ. Press.

佐藤 長

1959 『古代チベット史研究』上・下巻 同朋舎。

酒井真典

1978 「インド北西部ラダック・レーに於ける仏教文献調査報告」『第1回高野山大学ラマ教文化調査団報告書』高野山大学インド・ネパール学術調査事務局, pp. 10-14。

嶋崎 昌

1977 『隋唐時代の東トウルキスタン研究——高昌國史研究を中心として——』東京大学出版会。

SERVICE, E. R.

1975 *Origins of the State and Civilization: The Process of Cultural Evolution.* W. W. Norton & Company Inc.

SNELLGROVE, D. & T. SKORUPSKI

1977 *The Cultural Heritage of Ladakh*, Vol. I, Vikas Pub. House.

1980 *The Cultural Heritage of Ladakh*, Vol. II, Vikas Pub. House.

STEIN, R. A.

1971(1962) 『チベットの文化』山口瑞鳳・定方 晟訳 岩波書店 (orig. French ed. *La Civilisation Tibétiane*, pub. by Dunod, Editeur, Paris)。

THUPSTAN PALDAN

1982 *A Brief Guide to the Buddhist Monasteries and Royal Castles of Ladakh.* Golden Print.

ツルテム・ケサン (Tshul-khrims-skal-bzan)

1981 「ラダック地方のラマ教の宗派と寺院について」『第3回ラダック調査団報告書』種智院大学密教学会, インド・チベット研究会, pp. 101-106。

TUCCI, G. & W. HEISSIG

1970 *Die Religionen Tibets und der Mongolei.* Verlag W. Kohlhammer.

梅棹忠夫

1981 「生態系から文明系へ」梅棹忠夫編『文明学の構築のために』中央公論社, pp. 3-15。

山口瑞鳳

1983 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店。